

Title	明治前園芸植物渡来年表
Sub Title	Exotic garden flowers and trees brought in Japan : a chronology to 1868
Author	磯野, 直秀(Isono, Naohide)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2007
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 自然科学 (The Hiyoshi review of the natural science). No.42 (2007. 9) ,p.27- 58
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10079809-20070930-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

明治前園芸植物渡来年表

磯 野 直 秀

Exotic Garden Flowers and Trees Brought in Japan : A Chronology to 1868

Naohide ISONO

我々は衣食住の各方面で数多くの植物を利用してきたが、そのなかには海外から渡来した種類が少なくない。農作物ではイネ・ムギをはじめ、キュウリ・カボチャ・ナス・トマト・サツマイモ・ハクサイ……，果物ではイチゴ・ミカン・リンゴ……など，キノコや藻類を除く食用植物はほぼ全てが外来品だし，工芸作物もアイ・コウゾ・ミツマタ・ウルシ・ハゼノキ……，薬草もチョウセンニンジン・カンゾウ・ニッケイ・ハズなど，海外から持ち込まれた種類が多い。鑑賞用の樹木も——ウメ・レンギョウ・モクレン・キョウチクトウ・サルスベリ・シダレヤナギ・イチヨウ……，草花——スイセン・マツバボタン・ヒマワリ・オシロイバナ・ホオズキ・アサガオ・ヒガンバナ・キク……と，馴染み深い種類が軒並み渡来品である。

このような渡来植物がいつ頃に伝わったかを明らかにすることは，博物誌や文化史にとって重要な課題である。しかし，農作物・果樹・工芸作物・薬草木・庭木・草花を一度にまとめても複雑になるばかりなので，本稿では観賞用園芸植物を中心とし，その周辺（野菜や果物など）も多少取り上げて年表化するに留める。また，期間は奈良時代から江戸時代末までとする。

それを時代別に主要資料と主要渡来品について概観すると——

- ①奈良・平安時代：草木の種類を確認するには図，あるいは形状の詳細な記述が必要だが，この時代にはそのような資料が皆無に近い。したがって，史書（古事記・日本書紀……）や，古典文学（万葉集・枕草子・源氏物語……），辞書の類（新撰字鏡・本草和名・倭名類聚抄……）などに記されている植物名を拾うほかないが，当時の名称が近世～現代とは異なる場合が少なからずあるし，写本で伝わる辞書類では後世の追加が間々あり，注意を要する。
- この時期の渡来品は，ウメ・キク・ケイトウ・シダレヤナギ・ボタン・パショウ・アサガオ・ザクロ・シモクレン・シャクヤク・ジュズダマなど（ほぼ年表の順，以下同じ）。

〒 232-0066 横浜市南区六ツ川 3-76-3-D210, 慶應義塾大学名誉教授。(76-3-D210, 3-chome, Mutsukawa, Minami-ku, Yokohama 232-0066, Japan; Professor Emeritus, Keio Univ.) [Received Jan. 16, 2007]

- ②鎌倉時代：平安時代に引き続いて、史書や文学作品、辞書、日記類が主要な資料だが、絵巻物などに残る図から渡来植物が確認できる事例が多少加わる。

チャ・コウシンバラ・ナンテン・フヨウ・ムクゲなどが、この頃に渡ってきた。

- ③室町時代～安土桃山時代：『往来物』（当時の教科書）や『節用集』系の辞書、日記・日録（かんもんぎょき看聞御記・やましなけらいきお湯殿の上の日記・山科家礼記・蔭涼軒日録ほか）や、生花書が数多く残っており、好資料となる。それを調べてみると、従来江戸時代に渡来したとされてきた種類で、この頃すでに持ち込まれていた草木が多いことがわかってきた（磯野2006）。また、寺社などに残る絵画・彫刻資料も役立つ（植物文化史）が、画家のスケッチは僅かしか現存しないようである。

この時代に渡来したのは、イチョウ・スイセン・ホウセンカ・ジンチョウゲ・ヒガンバナ・ロウバイ・ソテツ・シュンギク・カボチャ・タバコ・トウガラシなど。

- ④江戸時代－1（17世紀）：宣教師が出版した『日葡辞書』や、俳書『毛吹草』『増続山ノ井』は、日常的に使われていた植物名を数多く含む優れた資料となる。また、画家のスケッチ集（狩野探幽・狩野常信・狩野重賢）も多くの渡来植物を含む（植物文化史、磯野2004A・B）。これらを調べて、いろいろな種類が従来言われていたよりも早く到来していたことがわかった。そのほか、本草漢和辞書といえる『多識編』や、初の百科図鑑『訓蒙図彙』、園芸書の元祖『花壇綱目』および『花壇地錦抄』も資料価値が高い。

イチジク・サツマイモ・シュウカイドウ・サルスベリ・アラセイトウ・センニチコウ・レンギョウ・トマト・ヒマワリ・ハクモクレン・エニシダ・オシロイバナなどが到来。

- ⑤江戸時代－2（18世紀）：この世紀の初頭に出版された『大和本草』『地錦抄附録』などに、17世紀の渡来に関する記事が少なからず見られる。また、18世紀前半には徳川吉宗政権の薬材政策のもとで中国・朝鮮からさまざまな薬草木が取り寄せられたが、それについては小石川薬園・駒場薬園・京都鷹峯薬園の記録や、『九淵遺珠』『物類品隲』の記事が役に立つ。琉球から薩摩藩に渡った種類については、曾占春がさまざまな著作に残した記録や、上野益三著『薩摩博物学史』が参考になる。

キョウチクトウ・キンシバイ・ニチニチソウ・ハボタン・トウカエデ・モウソウチク・チョウセンアザミ（アーティチョーク）・ギョリュウ・モッコウバラ・ガジュマルなどが渡来。

- ⑥江戸時代－3（19世紀）：19世紀に入ると新来の植物が急増するが、文政末年（1829）頃までは琉球や中国南部あたりから持ち渡られた種類が目立ち、以後は蘭船の舶載品が多いように思われる。ついで安政6年（1859）の開港の後には、遣米使節と遣欧使節が何百種類もの種子を持ち帰るなど、怒濤のごとく欧米の園芸植物が入ってくる。この世紀には多くの植物図譜が作成されたが、『草木錦葉集』『本草図譜』『梅園草木花譜』は文政・天保（1818～43）頃までの、『遠西舶上画譜』『新渡花葉図譜』『本草写生図譜』はそれ以後の状況をよく伝える。このほか、弘化2年（1845）の「異国草木会」の記録や、安政6年（1859）に作成された「天保度後蛮舶来草木銘書」も有用である。また、遣米使節と遣欧使節の持ち帰った種類については、近年、遠藤正治氏が詳細な検討を続けられ、その全容がほぼ明らかになっている

(遠藤2000~01)。

前半では、ノボタン・キズイセン・ムラサキオモト・さまざまな東洋蘭が入る。天保末から幕末には、ダリア・オジギソウ・クローバー・マツヨイグサ・カンナ・キンギョソウ・フクシア・リュウゼツラン・コスモス・スイートピー・パンジー・マツバボタン・ラベンダー・チューリップ・ゼラニウムなど、いまでも身近な種類が並ぶ。

凡例

- 1 本年表は、古代～江戸時代末に渡来した草花・庭木類を主な対象とするが、その周辺の馴染み深い農作物や果物も多少含めている。また、琉球や薩南諸島からの渡来、時には九州最南部産の種類も取り上げた。なお、紙数の制約から、大半の事例では原産地を省略した。
- 2 年表には、これまで調べたうちで、もっとも古い記載・絵画資料などの例を挙げた（波線を付した事例）が、それ以後の記載例や図示例、国内での移動も適宜採録した。
- 3 品名欄：原則として、まず現和名（片仮名）を挙げ、（ ）内に原記載名や漢字名、異名を記した。下線を付したのは原記載名やその振仮名である。原記載名が現和名と同じか、それに近い場合は、原記載名を略した。同一項に複数の品名を挙げた場合は、原則として五十音順としたが、例外もある。
- 4 注記欄：誰が写生したか、どこから渡来したかなどの要点を記し、（ ）内に出典・文献を示した。（梅園草木花譜・春2）の「春2」、（常信写生図巻5）の「5」などは巻次である。『植物渡来考』『資源植物事典』『本草図譜・解説』などには渡来記事の出典を挙げていない場合があるが、そのまま引用して、出典を今後の探索に譲った。また、「➡西暦年」はその年に関連記事があることを示す。
- 5 漢名に対する和名は、『[改訂増補] 牧野新日本植物図鑑』『本草の植物』『植物文化史』などに拠った。
- 6 『古事記』『日本書紀』『万葉集』『枕草子』『源氏物語』などに出る品名は『古典植物事典』に準拠した。
- 7 『草木花写生図巻』『大和本草』『花木真写』『花彙』『草木錦葉集』『本草図譜』『草木図説・木部』『本草写生図譜』などに収録されている種類の現和名は、影印本・翻刻本における同定にしたがった。
- 8 出典に「〇〇年渡来」とあっても、それが江戸・京都・尾張などに移入された年を指すらしいことがあるが、原記載に明記されている場合を除き、一々断ってはいない。
- 9 スケッチ集と日記の記録は、月日まで記した。
- 10 引用文中の〔 〕は磯野の注記である。
- 11 品名の掲出年索引を、稿末に付した。

和暦	(西暦)	品名	注記・出典
慶雲 2	(705)	● <u>ウメ</u>	葛野王 (本年没) の『懷風藻』所収詩文に初出。
和銅 5	(712)	● <u>アズキ</u> (小豆)・ <u>ダイコン</u> (おほね=大根)・ <u>ダイズ</u> (まめ)・ <u>クチバナ</u> ・ <u>ハス</u> (はちす)・ <u>ヒョウタン</u> (ひさご)・ <u>ホオズキ</u> (あかがち)・ <u>ムギ</u> ・ <u>モモ</u>	本年撰上の『古事記』に名が出る／ハスとヒョウタンは縄文・弥生時代に導入されたと考えられている。
養老 4	(720)	● <u>ウルシ</u> ・ <u>クラ</u> ・ <u>スモモ</u> ・ <u>ニワウメ</u> (はねず)	本年撰上の『日本書紀』に初出／「はねず」をニワザクラとする見解 (植物渡来考) もある。
天平 6	(734)	● <u>チシヤ</u> (苣)・ <u>ナス</u> (茄子)・ <u>フユアオイ</u> (葵)	正倉院文書「造仏所作物帳」に記載がある。
天平勝宝 3 (751)		● <u>キク</u> ・ <u>シダレヤナギ</u> (柳)	本年成立の『懷風藻』に名が出る。
天平宝字 2 (758)		● <u>カキ</u> ・ <u>ナツメ</u> ・ <u>ミョウガ</u>	正倉院文書「銭下充帳」に記載がある。
延暦 3	(784)	● <u>キュウリ</u>	奈良時代 (710～本年) の平城宮遺跡で多数の種子が発見された (平城宮発掘調査報告 II)。
延暦 4	(785)	● <u>カラタチ</u> ・ <u>ケイトウ</u> (唐藍)・ <u>シダレヤナギ</u> ・ <u>フジバカマ</u> ・ <u>ベニバナ</u> (末つむ花)・ <u>ヤブカンゾウ</u> (萱草, <u>わすれぐさ</u>)	大伴家持 (本年没) 編『万葉集』に名が出る／キクやボタンを詠んだ歌は一つも無い／八重のヤブカンゾウは中国原産の史前帰化植物、一重のノカンゾウは別の変種で日本に自生 (四季の花事典)。
延暦 18	(799)	● <u>ワタ</u>	三河国に漂着した崑崙人 (インド人) が種子を伝え、太宰府・紀伊・四国に植えた (類聚国史) が、やがて絶えた。
延暦 24	(805)	● <u>チャ</u>	最澄、唐より茶を持ち帰るが、部分的にしか拡まらない。
大同 1	(806)	● <u>ボタン</u>	空海、唐より薬用に牡丹を持ち帰る (四季の花事典)。
弘仁 9	(818)	● <u>シヤクヤク</u> (芍薬)・ <u>バシヨウ</u> (芭蕉)	本年成立の『文華秀麗集』に名が出る。
延喜 14	(914)	● <u>アサガオ</u> (けにごし=牽牛子)・ <u>アンズ</u> (からもも)・ <u>シオン</u> (しをに)・ <u>ハチク</u> (くれたけ)・ <u>バエ</u> (さうび=薔薇)	この頃成立の『古今和歌集』に所収／ハチクは淡竹で、次項『本草和名』に「淡竹、くれたけ」とある／薔薇はゴヤバラかコウシンバラ (長春花⇒1213) という (植物渡来考, 本草の植物)／ボタンやシヤクヤクは詠まれていない。
延喜 18	(918)	● <u>アブラナ</u> (芸薹をち)・ <u>イチビ</u> ・ <u>エンジュ</u> (槐え)・ <u>カジノキ</u> (柠かち)・ <u>キリ</u> ・ <u>ザクロ</u> ・ <u>シモクレン</u> (木蘭)・ <u>ジュズダマ</u> (薏苡つしたま)・ <u>シュロ</u> (棕櫚すろのき)・ <u>タチアオイ</u> (蜀葵からあふひ)・ <u>ノウゼンカズラ</u> (のうせう)・ <u>ビワ</u> (ひは)・ <u>ホウキギ</u> (地膚まきくさ)・ <u>ボケ</u> (もけ)・ <u>ユズ</u> (柚ゆ)・ <u>ワリンゴ</u> (林檎)	この頃成立の『本草和名』に左記の品を収録する／アブラナ⇒1181 (なたね), 1592
承平 5	(935)	● <u>キンセンカ</u> (金銭花)・ <u>マダケ</u> (苦竹, かはたけ)	この頃成立の『倭名類聚抄』に名が出る。古代にホンキンセンカ <i>Calendula arvensis</i> が入り、いま普通のトウキンセン <i>C. officinalis</i> の渡来は幕末とされる。⇒1830～43
天禄 2	(971)	● <u>ボタン</u> (ぼうたん)	『蜻蛉日記』6 月条に、花の描写がある。

長保 3	(1001)	● <u>カラナデシコ</u> (石竹)・ <u>ハゲイトウ</u> (<u>かまつかの花</u>)・ <u>ユウガオ</u>	この頃成立の『枕草子』に名が出る。
寛弘 4	(1007)	● <u>ケシ</u> ・ <u>トコナツ</u>	この頃成立の『源氏物語』に名が出る。
大治 3	(1128)	● <u>ニワザクラ</u>	本年頃成立の歌集『散木奇花集』に名が出る (花木園芸)。
永暦 1	(1160)	● <u>バショウ</u>	この頃までに描かれた『鳥獣戯画』甲巻に図がある。
養和 1	(1181)	● <u>アブラナ</u> (<u>芥子なたね</u>)・ <u>エンドウ</u> (<u>園豆</u>)	本年頃作成の『色葉字類抄』に収録。「ナクネ」の呼称は初出。
文治 2	(1186)	● <u>ブドウ</u>	この頃、甲州で葡萄栽培が始まる (農業事物起源集成)。
建久 1	(1190)	● <u>ボダイジュ</u> (菩提樹)	栄西、宋から種子を日本に送る (植物渡来考)。
建久 2	(1191)	● <u>チャ</u>	栄西、宋より茶を持ち帰って広め、定着させる。→805
建保 1	(1213)	● <u>コウシンバラ</u> (<u>長春花</u>)	『明月記』12月16日条。→914注記
承久 1	(1219)	● <u>ザクロ</u>	本年成立の『北野天神縁起』に絵がある (本草の植物)。
寛喜 2	(1230)	● <u>ナンテン</u> (<u>南天竺</u>)	『明月記』6月20日条。
弘安 4	(1281)	● <u>フヨウ</u> (<u>芙蓉ふよう</u>)・ <u>ムクゲ</u> (<u>木槿むくげ</u>)	1274~81間に成立したとされる『塵袋』に名が出る。
延慶 2	(1309)	● <u>コウシンバラ</u> ・ <u>ニワザクラ</u>	本年成の『春日権現験記』に描かれている (本草の植物、本草図譜88解説)。→1128, 1213
貞治 5	(1366)	● <u>ニワウメ</u> (庭梅)	本年成の『詞林采葉抄』に「ニハウメ」の名が初出。古くは「はねず」と呼んだらしい (花木園芸)。→720
永和 4	(1378)	● <u>センノウ</u>	『後深心院閨白記』8月3日条に「せにをうくゑ……近來出来」とある。
応永 7	(1400)	● <u>カリシ</u> (<u>花梨子はななし</u>)	14世紀後半に作られた『庭訓往来』に名が出る。
応永31	(1424)	● <u>ラカンマキ</u> (羅漢楨)	11月26日、禁裏に「羅漢樹」2本を植える (看聞御記)。
文安 1	(1444)	● <u>イチヨウ</u> (<u>銀杏いちやう</u>)・ <u>カイドウ</u> (<u>海棠</u>)・ <u>キンカン</u> (<u>橘柑きんかん</u>)・ <u>スイセン</u> (<u>水仙花</u>)・ <u>碧桃</u> ・ <u>ムクゲ</u> (<u>槿花むくげ</u>)・ <u>モクセイ</u> (<u>木犀</u>)	本年成立の部類別辞書『下学集』に所収/当時の海棠はミカイドウで、ハナカイドウは江戸時代の中頃に渡来という (四季の花事典)。→1746, 1822 / 碧桃は白花の桃/モクセイ→1492, 1713注記, 1719
文安 3	(1446)	● <u>ハナズオウ</u> (<u>紫荊</u>)	本年成の『塩囊抄』に漢名が載るが、和名は欠く。
享徳 3	(1454)	● <u>ホウセンカ</u> (<u>鳳仙花</u>)	本年序の部類別辞書『撮壤集』に名が出る。
文明10	(1478)	● <u>ワリngo</u>	『お湯殿の上の日記』6月1日条に「二そん院より、りんご一折」とある。
文明13	(1481)	● <u>アオギリ</u> (<u>梧桐</u>)・ <u>ケマンソウ</u> (<u>花蔓花</u>)・ <u>ジンチョウゲ</u> (<u>沈丁花</u>)・ <u>チャンチン</u> (<u>椿</u>)	一条兼良 (本年没) 著『尺素往来』に名が出る。「春菊」も記されているが、現在のシュンギクではないらしい (植物文化史)。
文明16	(1484)	● <u>チョウセンサガオ</u> (<u>曼陀羅華</u>)・ <u>ヒガンバナ</u> (<u>曼殊沙華</u>)・ <u>ロウバイ</u> (<u>蛭梅</u>)・ <u>酔楊妃</u> (<u>菊花銘</u>)	辞典『温故知新書』(本年序)に収録。
文明年間 (1469~86)		● <u>ワタ</u>	この頃、種子が再来か (資源植物事典)。江戸時代に木綿の生産が盛んになる。→799, 1860
長享 2	(1488)	● <u>オウバイ</u> (<u>わうはい</u> = <u>黄梅</u>) ● <u>高麗菊</u>	1月10日、宮中での立花に使用 (山科家礼記)。『蔭涼軒日録』3月22日条に「高麗菊」の語が初出するが、現在の春菊の異名か、別の花を指すかはわからない。

		• <u>ソテツ</u>	『蔭涼軒日録』9月16日条に、「大内庭ニ、 <u>ソテツ</u> ト云草アリ、自 ^ニ 高麗 ^一 来」とある。
延徳2	(1490)	• <u>ガンピ</u> (鴈飛, ナデシコ科)	6月18日, 蔭涼軒にガンピなどが贈られる(蔭涼軒日録)。
延徳3	(1491)	• <u>シャガ</u> • <u>ハクチョウゲ</u> • コウシンバラ: 白花	1月14日, 宮中での立花に使用(山科家礼記)。 4月22日, 宮中での立花に使用(山科家礼記)。 4月24日, 宮中での立花に使用(山科家礼記)。→
		• <u>コカキツバタ</u> (小かきつはた)	1213
		• <u>ゼニアオイ</u> (小葵)	『山科家礼記』4月28日条。→1725
明応1	(1492)	• <u>オニユリ</u> (鬼百合)	5月24日, 宮中での立花に用いる(山科家礼記)。 5月15日, 『蔭涼軒日録』に「似 ^ニ 鬼百合 ^一 」の叙述がある。オニユリは食用に栽培されたが, 朝鮮が原産地かという。
		• <u>ギンセンカ</u> (てうろさう=朝露草)・ <u>ネジヤメ</u> (はりん=馬蘭)	5月24日, 宮中での立花に使用(山科家礼記)。
		• <u>ギンモクセイ</u> ・ <u>ゴジカ</u> (午時花)・ <u>トロロアオイ</u>	土佐広周(本年没)画『四季花鳥図』に描かれている(植物文化史, 本草図譜80解説)。
明応5	(1496)	• 太白 (菊の品種名)	『お湯殿の上の日記』9月18日条。
明応9	(1500)	• <u>イチハツ</u> (一八)・ <u>クネンボ</u> (九年母)・ <u>シュウメイギク</u> (秋冥菊=秋明菊)・ <u>テッセン</u> (鉄線花)	『文明本節用集』(15世紀末頃成立)に収録/クネンボは食用以外に斑入品が鑑賞された→1827/秋明菊は山城貴船に野生化したものが多いので, 別名「貴船菊」。
		• <u>ブッソウゲ</u> (仏勝花)・ <u>マツリカ</u> (末利花)	『和漢三才図会』(1713刊)に「貴布襦菊」が初出。
大永5	(1525)	• <u>ゲンゲ</u>	本年頃の成立とされている『新撰類聚往来』に名が出る。ブッソウゲ→1544
天文13	(1544)	• <u>ブッソウゲ</u> (仏笑花=仏桑花)	土佐光信(本年没)画『花草草虫図』に出る(落葉)。
			『言継卿記』5月7日条に「仏笑花二枝進上」。以後10年間に計16回, この花の記事が出ており, 言継卿が連年栽培していたことが明らか。冬を越す秘策があったのか, この「仏桑花」が現ブッソウゲとは別の花なのか。→1500
天文19	(1550)	• <u>テッセン</u> (鉄線)	『土佐絵画資料: 植物写生帖』に, この年の写生が残っている(榊原1995)。→1500
永禄6	(1563)	• <u>シュンギク</u> (春菊, 別名高麗菊)	『お湯殿の上の日記』4月5日条に「かうらいきく[高麗菊]」, 同4月13日条に「しゅんきく」と記されている。そのいずれか, あるいは両者とものが現在のシュンギク(古別称, 高麗菊)を指すと思われる。
天正4	(1576)	• <u>ジャガイモ</u>	本年渡来(長崎年暦両面鏡)というが, 欧州への移入・伝播(1580年代)を考えると早すぎる。慶長3年(1598)とする説(牧野新日本植物図鑑)などの異説もある。
天正7	(1579)	• <u>カボチャ</u> (ニホンカボチャ)	種子が渡来(長崎年暦両面鏡)。→1608
		• <u>トウモロコシ</u>	ポルトガル船が長崎にもたらす(資源植物事典)。
文禄1	(1592)	• <u>アブラナ</u> (<u>アフラナ</u>)	4月27日, 『多聞院日記』本日条に名が出る。本種は古く『本草和名』(→918)に「芸薹をち」, ついで, 『色葉字類抄』(→1181)に「ナタネ」(菜種)の名が現われるが, 「アブラナ」(油菜)は後発名だったらしい。
文禄4	(1595)	• <u>オリーブ</u> ・ <u>マルメロ</u>	メキシコから長崎に持ち渡ると『日本王国記』訳本に記す。

		● <u>ソラマメ</u>・<u>ブッシュカン</u>・<u>ヘチマ</u>	本年刊の『ラホ日辞典』に名が出る。
文禄年間 (1592～95)		● <u>タバコ</u>・<u>トウガラシ</u>	同時に渡来したという(成形図説)。両種とも異説が多いが、文禄・慶長年間頃の渡来は間違いないだろう。
慶長 3	(1598)	● <u>トケイソウ</u> (時計草)	秀吉時代(1582～本年)に渡来したという(草花図譜)。
		● <u>セロリ</u> (<u>清正人參</u>, オランダミツバ)	朝鮮に出兵していた加藤清正が持ち帰ったという(本草図譜47)が、匂いが嫌われて食用にはせず、薬用であった。
慶長 4	(1599)	● <u>タバコ</u>	種子を輸入し、長崎桜馬場で栽培(長崎年暦両面鏡)。
慶長 8	(1603)	● <u>ジオウ</u> (地黄)・<u>カタマメ</u>・<u>ニガウリ</u> (ツルレイシ)・<u>ビヨウ</u> (ビヨウヤナギ)・<u>ボンテンカ</u>・<u>ユスラウメ</u>	左記は本年刊の『日葡辞書』における記載名／「ビヨウ」の注記は「花の咲く柳の類」／「ウコン」の名も収録されているが、これは薬物を指すので、本項に挙げない。
慶長13	(1608)	● <u>カボチャ</u>	本年建立の北野天満宮の欄間に彫刻がある(植物文化史)。
慶長14	(1609)	● <u>ブッソウゲ</u>・<u>マツリカ</u>	12月26日、島津家久が駿府へ献上(実紀)。→1500
慶長16	(1611)	● <u>サンシチソウ</u> (山漆草=三七)	金森出雲守可重が家康に献上(駿府政事録, 8月12日)。山漆は三七の異名(本草綱目)。
		● <u>サツマイモ</u> (琉球芋)	琉球に出兵していた薩摩藩士が持ち帰る(通航一覧4)。
慶長19	(1614)	● <u>ミツマタ</u>	製紙に用いたとの記録あり(資源植物事典)。
元和 5	(1619)	● <u>イチジク</u>	本年離日したスペイン人アビラ・ヒロンの『日本王国記』訳本に「日本にはイチジクがある」旨の記述がある。
寛永 8	(1631)	● <u>イチジク</u> (「無花果……一熟」)・<u>シュロチク</u> (櫻竹するたけ)・<u>ツルムラサキ</u> (落葵)・<u>ニンジン</u> (セリニンジン)・<u>ノゲイトウ</u>・<u>ホウレンソウ</u> (菠薐, からな) ● <u>カザグルマ</u>・<u>テッセン</u>・<u>ハカタユリ</u>	本年刊の『多識編』に名が出る／シュロチクはヤシ科で、カンノンチク(→1688)と同属／ノゲイトウは渡来して野生化したのだろうという(本草図譜15解説)。
			本年頃描かれた妙心寺天球院の襖絵にある(本草図譜29・51解説)／カザグルマは日本に自生するが、園芸品が中国から伝来か／ハカタユリは「博多百合」だが、中国産。漢名「百合」はこのユリを指したという(本草の植物)。
寛永 9	(1632)	● <u>ガジュツ</u> (莪茂=蓬莪茂)	この年以前に薩摩に入り、栽培(薩摩博物学史)。
寛永12	(1635)	● <u>コリヤナギ</u> (杞柳: 誤用)	但馬国城崎郡で盛んに栽培する(日本物産年表)。原産地は朝鮮。樹皮を行李(コウリ)の材料とするのが和名の由来で、上記地域はこの頃から現代まで柳行李の名産地である。→1825
寛永18	(1641)	● <u>シュウカイドウ</u> (秋海棠)	中国より長崎に渡来し、正保年間(1644～47)より広まる(水谷記聞: 雑纂220に引用)。
寛永19	(1642)	● <u>トケイソウ</u> (時計草)	本年より前の作とされる延暦寺根本中堂天井画に図がある(植物文化史)。→1598
寛永年間 (1624～43)		● <u>ルコウソウ</u> (<u>カンボジアアサガホ</u>)	寛永年間に渡来(大和本草)。

正保2	(1645)	●カザグルマ・ゴジカ・<u>コデマリ</u>・<u>サルスベリ</u> (百日紅)・<u>タチアオイ</u>・<u>トロロアオイ</u> (とろろの花)・<u>ハカタユリ</u>・<u>ヒナゲシ</u> (美人草)・<u>ルコウソウ</u>・<u>レダマ</u> ●<u>サンダンカ</u> (三段花) ●<u>サボテン</u> (仙人掌)	本年刊の『毛吹草』に左記の名が出る。それぞれの種類と呼称が広まっていたことを示す／カザグルマ・ハカタユリ⇒1631／ゴジカ・トロロアオイ⇒1492／レダマの名はポルトガル語・スペイン語の Retama に由来する。 琉球から初めて薩摩に渡る (薩摩博物学史)。 正保年間に渡来 (異国草木会目録)。⇒1717
正保年間 (1644~47)			
正保~万治年間 (1644~60)		●<u>オランダセキチク</u> (あんじやべる)・<u>チャラン</u> (茶蘭)・<u>ナツズイセン</u> (摩訶曼珠)・ハマナスまたは<u>マイカイ</u> (玫瑰)・<u>西洋バラ</u> (らうさ)	左記の植物が渡来 (地錦抄附録)／オランダセキチクとセキチクの交雑により現在のカーネーションが作出された／『地錦抄附録』は「玫瑰」にハマナスの振仮名を付しているが、中国産の玫瑰 (=マイカイ:ポタンバラ) そのものが入った可能性もある (植物文化史)。
明暦3	(1657)	● <u>スルガラン</u> (蘭)	7月9日, 狩野重賢が写生 (草木写生・秋上)。中国南部・台湾原産だが、なぜ駿河蘭というかは未詳。⇒1717
万治1	(1658)	● <u>ノウゼンカズラ</u>	7月1日, 狩野重賢が写生 (草木写生・秋上)。⇒918
万治2	(1659)	●<u>フジモドキ</u> (しけんし=しげんじ, 別名サツマフジ) ●<u>リュウガン</u> (竜眼)・<u>レイシ</u> (荔枝)	2月11日, 狩野重賢が写生 (草木写生・春下)。 薩摩藩, 山川郷福元 (のち山川薬園) に植える (薩摩博物学史)。
万治3	(1660)	● <u>アラセイトウ</u> (アラセイトウ)	3月20日, 狩野重賢が写生 (草木写生・春下)。
万治年間 (1658~60)		● <u>アブラギリ</u>	この頃の記録がある (資源植物事典)。
寛文1	(1661)	● <u>ユスラウメ</u>	5月25日, 狩野探幽が写生 (草木花写生図巻)。⇒1603
寛文2	(1662)	● <u>ゼニアオイ</u> (こあおい, 赤花)	5月11日, 狩野探幽が写生 (草木花写生図巻)。⇒1491
		● <u>ウコン</u> (鬱金)	7月26日, 狩野重賢が写生 (草木写生・秋上)。
寛文3	(1663)	● <u>フユボタン</u> (冬牡丹=寒牡丹)	本年刊『増続』山の井に「冬牡丹」が初出。⇒1683
寛文4	(1664)	● <u>ヒギリ</u> (唐桐=緋桐)	6月29日, 江戸で松平直矩が貰う (松平大和守日記)。
		● <u>コウオウソウ</u> (紅黄草)・ <u>センジュギク</u> (三葉丁子)・ <u>センニチコウ</u> (千日紅)・ <u>タケシマユリ</u> (武蔵百合)・ <u>ダンドク</u> (だんどくせん)・ <u>ヒマワリ</u> (日向葵)	当時珍重されたらしく、以後も「唐桐」が日記に多出。本年稿の『花壇綱目』草稿本に含まれる (図は無い)。 紅黄草はフレンチ・マリーゴールド／「三葉丁子」は『大和本草』(⇒1709)の「三波丁子」と同じと思われるので、センジュギク (千寿菊) とした。いまは、アフリカン・マリーゴールドと呼ばれることが多い／タケシマユリは鬱陵島産。
寛文5	(1665)	● <u>オグラギク</u> (さんせうきく)	9月19日, 狩野探幽が写生 (草木花写生図巻)。
寛文6	(1666)	●<u>アオギリ</u> (梧桐)・<u>オオケタデ</u>・<u>キササゲ</u> (角楸)・<u>サトウキビ</u> (甘蔗)・<u>シュロチク</u> (棕櫚竹)・<u>シュンギク</u> (春菊, かうらいぎく)・<u>ソテツ</u>・<u>トロロアオイ</u>・<u>ヒナゲシ</u> (麗春)・<u>ヒガンバナ</u> (しびとばな)・<u>ヒマワリ</u> (丈菊)・<u>フヨウ</u> (芙蓉)・<u>ヤブカンゾウ</u>	本年刊の『訓蒙図彙』に図が出る／「葎, けたで・いぬたで」の図はオオケタデ (帰化植物)／ヒマワリは, 16世紀末にヨーロッパに入り, 中国では『群芳譜』(1621)に記載されている (植物文化史)。⇒1664／トロロアオイ⇒1492, 本年末項

		• ロウバイ (南京梅)	1月22日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻9)。→ 1484
		• オウバイ (黄梅)	閏2月12日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻1) → 1488
		• レンギョウ (れんきやう)	『松平大和守日記』3月21日条に「れんきやうの山吹色」と記されているのは, 現在のレンギョウと思われる。古代の連翹は何を指すか不明。
		• レダマ	4月19日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻4)。→ 1645
		• トロロアオイ	9月6日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻18)。→ 1492
寛文8	(1668)	• トマト (唐なすび)	7月12日, 狩野探幽が写生 (草木花写生図巻)。→ 1703
		• ヒギリ (緋桐, <u>とうぎり</u> = 唐桐)	7月30日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻14)。→ 1664
寛文10	(1670)	• ナニワイバラ? (はとばら)	3月29日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻3)。「浪華」の名がつくが, 中国原産。別名ハトヤバラ。
寛文11	(1671)	• ルコウソウ	8月30日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻15)。
寛文12	(1672)	• チョウセンアサガオ (朝鮮朝顔)	8月15日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻16)。「朝鮮朝顔」の呼称がすでに使われていた。→1484
		• ヒレアザミ (飛廉, <u>ヨニマユハキ</u> = 鬼眉掃)	本年刊『本草綱目』和刻本 (寛文本) の附録「本草綱目品目」に所収。いま日本各地に見られるが, 古くに渡来して, 野生化したのだろうという (本草図譜15解説)。
寛文年間 (1661~72)		• クロフネツツジ (黒船つつじ)・<u>ケラマツツジ</u> (唐つつじ)・ブツソウゲ (<u>仏桑花</u>)	左記の種類が渡来 (地錦抄附録) / 「唐つつじ」の同定は『花木園芸』による / ブツソウゲは琉球から入り, 冬に枯死したが, 享保8年 (1723) に再来 (地錦抄附録)。
延宝1	(1673)	• ギンセンカ (銀盞花)	7月13日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻13)。→ 1492
延宝2	(1674)	• ミツマタ	2月13日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻3)。→ 1614
		• ジンチョウゲ (沈丁花)	3月30日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻3)。→ 1481
		• カボチャ・シュウメイギク・<u>バイモ</u>・ビヨウヤナギ・ホンキンセンカ・レンギョウ・ロウバイ	本年没した狩野探幽の『草木花写生図巻』には, 既出件以外に左記の草木 (写生年不明) の写生がある / おそらくバイモはもっとも古い図 / ホンキンセンカ → 935 / 本図譜には芍薬と牡丹の品種が多数含まれ, 流行を示す。一方, 菊は改良が進んでいない頃の姿がわかる (植物文化史)。
延宝3	(1675)	• ホウセンカ	6月26日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻10)。→ 1454
		• <u>タコノキ</u> (<u>かちやんノ木</u>: 誤認)	幕府の探検隊が無人島 (小笠原諸島) から木と実を持ち帰る (磯野1997, 通航一覧・付録12)。6月27日, 狩野常信はその実を写生する (常信写生図巻10)。
		• <u>ラツカセイ</u> (落花生)	本年成の『遠碧軒記』に近來渡ると記す。
延宝4	(1676)	• <u>シナガワハギ</u>	6月18日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻10)。
延宝5	(1677)	• <u>ハクモクレン</u>	『お湯殿の上の日記』2月25日条。
延宝8	(1680)	• チャラン (茶米蘭)	7月15日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻12)。

		● <u>ローズマリー</u> (<u>らうつまれいな</u>, 別名マンネンロウ, 迷迭香) ● <u>トキンイバラ</u> (<u>ごやをぎ</u>) ● <u>エニシダ</u> (<u>ゑにすだ</u>)・<u>タモトユリ</u>・<u>チョウセンカサユリ</u>・<u>トウツバキ</u> (<u>唐椿</u>) ● <u>ハゼノキ</u> (<u>リュウキュウハゼ</u>)	8月4日, 狩野常信が写生する(常信写生図巻2)。学名は Rosmarinus officinalis。 本年刊の『合類節用集』に所収。➡1698 延宝年間に渡来(地錦抄附録)／タモトユリはトカラ列島中の口之島にだけ自生している。
延宝年間 (1673~80)			
天和2	(1682)	● <u>サルスベリ</u> (<u>百日紅</u>)	延宝の頃, 琉球より薩州に渡来。やがて, 九州一帯に拡まる(農家益初編・後編)。実から蛾を採る。 7月9日, 狩野常信が写生(常信写生図巻13)。➡1645
天和3	(1683)	● <u>フユボタン</u>	『お湯殿の上の日記』本年~貞享3年(1686)に, フユボタンらしい牡丹の記事が多出する。➡1663
天和年間 (1681~83)		● <u>ヒメバシヨウ</u> (<u>美人蕉</u>)	琉球より渡る(本朝世事談綺)。『大和本草』(1709刊)には「初薩州日州にアリ……近年畿内処々ニウフ」と記す。
		● <u>ニッケイ</u> (<u>肉桂</u>)	中国僧心越禪師が, 持参した肉桂の種子を江戸の水戸藩邸に植える(植物渡来考)。薬用のほか, 葉の斑入品が愛好された。➡1827
貞享1	(1684)	● <u>ハナズオウ</u> (<u>花すはう</u>)	和名「ハナズオウ」が初出(抛入花伝書:「蘇枋すはう」の項)。➡1446
天和・貞享年間 (1681~87)		● <u>ヒイラギナンテン</u> (<u>柃南天</u>)	この頃, 渡来(地錦抄附録)。
元禄1	(1688)	● <u>カンノンチク</u> (<u>観音竹</u>)	元禄初年に渡来(本草図譜95解説)。「竹」とつくが, シュロチク(➡1631)と同じくヤシ科。
元禄8	(1695)	● <u>ゴヤバラ</u> (<u>ごや荊</u>)・ <u>テッポウユリ</u> (<u>琉球百合</u>)・ <u>トウジュロ</u> (<u>唐棕櫚</u>)・ <u>ピロウ</u>	本年刊の『花壇地錦抄』に収録／ゴヤバラはノイバラの変種の一つ Rosa multiflora var. carnea で, 一名ボサツイバラ, 中国産／テッポウユリ ➡1800／古代の「あぢまさ」はピロウらしいが, 葉を取り寄せて用いただけらしいので, 採録しなかった。本書は「薩州ニあり」と記す。
元禄9	(1696)	● <u>コノテガシワ</u> (<u>そくはく</u> =側柏)	3月9日, 狩野常信が写生(常信写生図巻2)。
元禄10	(1697)	● <u>エニシダ</u> (<u>ゑにすた</u>)	3月22日, 狩野常信が写生(常信写生図巻3)。
元禄11	(1698)	● <u>オシロイバナ</u> (<u>白粉花</u>)・ <u>シジミバナ</u> (<u>こごめ花</u>)・ <u>トキンイバラ</u> (<u>こやをぎ</u>)	本年刊の『花譜』に名が出る。トキンイバラは, 当時の関東ではボタンバナ, 関西ではクイバラとも呼んだと記されている。学名は Rubus illecebrosus f.token-ibara。
元禄12	(1699)	● <u>オシロイバナ</u> ・ <u>コウオウソウ</u> (<u>紅黄草</u>)・ <u>タケシマユリ</u> (<u>竹島百合</u>)・ <u>タモトユリ</u> (<u>袂百合草</u>)・ <u>ダンドク</u> ・ <u>チョウセンアサガオ</u> ・ <u>テッポウユリ</u> (<u>琉球百合草</u>)・ <u>ネジヤメ</u>	本年刊の『草花絵前集』に図が出る。
元禄13	(1700)	● <u>マツリカ</u> (<u>まりくわ</u> =茉莉花)	7月2日, 狩野常信が写生(常信写生図巻13)。➡1500
元禄15	(1702)	● <u>カザグルマ</u> : 紫八重	4月23日, 狩野常信が写生(常信写生図巻4)。➡1631
元禄16	(1703)	● <u>ハクチョウゲ</u> (<u>白丁花</u>)	4月29日, 狩野常信が写生(常信写生図巻4)。➡1491

		• トマト (<u>おらんだなすび</u>)	8月15日, 狩野常信が枝に成った実を写生 (常信写生図巻16)。現在の通称ミニトマト的な大きさ。➡1668
元禄年間 (1688~1703)		• <u>アマ</u> (亜麻)	この頃渡来。亜麻仁油を採るために栽培 (資源植物事典)。
宝永3	(1706)	• サンダンカ (<u>三壇花</u>)	7月27日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻14)。➡1645
		• プッソウゲ (<u>仏相花</u>)	7月30日, 狩野常信が写生 (常信写生図巻14)。➡1500
宝永6	(1709)	• <u>イザヨイバラ</u> (ラウザイバラ)・<u>オオグルマ</u> (木香)・<u>コクチナシ</u>・<u>ザボン</u> (ざんぼ)・<u>サンシユユ</u> (山茱萸)・<u>ダンギク</u> (ランギク)・<u>ナンキンハゼ</u> (烏臼木)・<u>パセリ</u> (オランダセリ)・<u>ヒメザクロ</u> (朝鮮石榴)・<u>ホテイチク</u>・「黄薔薇」	本年刊の『大和本草』に所収／イザヨイバラはサンシヨウバラ (一重, 淡紅色) の変種で, 八重咲き。多数の花弁の一部に欠けた個所が常にあるのを, 十六夜の月になぞらえた命名／ザボンは食用のほか, 葉の斑入品が鑑賞された➡1827／ナンキンハゼは「近年異邦ヨリ来ル」／ホテイチク (琉球竹) は「琉球ヨリ来レリ」／「黄薔薇」はマイカイ (玫瑰) の変種 <i>Rosa odorata</i> var. <i>pseudoinдика</i> か (本草図譜27解説)。
宝永・正徳年間 (1704~15)		• <u>サンゴジュナ</u> (珊瑚菜)・<u>ショカツナ</u> (諸葛菜)	左記の種類が渡来 (地錦抄附録)。ハボタン (➡1717) は諸葛菜から生まれたらしい。
正徳3	(1713)	• <u>キョウチクトウ</u> (夾竹桃)・<u>ナガキンカン</u>	本年刊『和漢三才図会』に所収／キョウチクトウ➡1764／本書には, モクセイ類ではギンモクセイしか実見していないと記されている (➡1492, 1719)／白い実をつけるナンテンが珍重されているとの記述もある。本年刊の『菜譜』に名が出る。現在はエンダイブともいう。
正徳4	(1714)	• <u>キクヂシャ</u> (オランダチシャ)	本年刊の『大和本草諸品図』に図がある。琉球から薩摩に伝わる (本草綱目纂疏)。
正徳5 正徳年間 (1711~15)	(1715)	• <u>レモン</u> (<u>りまん</u>) • <u>シカクダケ</u> (<u>方竹</u>)	
享保2	(1717)	• <u>ウチワサボテン?</u> • <u>キンシバイ</u> (金糸梅)・スルガラ (駿河蘭)・<u>トケイソウ</u> (時計草)・<u>ニチニチソウ</u> (日々草)・<u>ハボタン</u> (葉牡丹)・<u>ハラン</u> (葉蘭)	本年刊『書言字考節用集』の「霸王樹さつぼうさちら」は, 「如 ^レ 掌」との注記からウチワサボテンらしい。本年成の『諸禽万益集』後書に出る名／『芳園巡遊録』もキンシバイを享保年間渡来とする／駿河蘭 (➡1657) と時計草=時計草 (➡1598, 1642) はそれぞれの名の初出／ニチニチソウ➡1777／ハボタンは日本で改良されたともいう➡1735
享保4	(1719)	• <u>エゾギク</u> (薩摩菊)・<u>キンモクセイ</u> (丹桂)・<u>ドウカンソウ</u> (王不留行)	本年刊の『広益地錦抄』に所収／エゾギク, 一名サツマギクは日本には無く, 中国東北部産。
享保5 享保6	(1720) (1721)	• <u>ビンロウ</u> (檳榔) • <u>トックリイチゴ</u> (覆盆子) • <u>ハズ</u> (巴豆)・<u>ハナシャジン</u> (沙参) • <u>チョウセンニンジン</u> (朝鮮人参)	蘭船が生木を持ち渡る (植物渡来考)。清船が持ち渡る (鷹峯官園雑記)。本年, 長崎から小石川薬園に, 左記の品を移す (御預御薬草本書付)。幕府の要請で, 対馬藩が生根3本を献上。以後, 享保13年までに計6回, 生根計35本・果実60個を献じ, 幕府は試行錯誤を重ねた末, 享保末年には栽培技術確立した (日本薬園史の研究, 田代1999)。
享保10	(1725)	• <u>ココヤシ</u> (椰子樹)	幕府の命で蘭船が30個の実を持ち渡る。伊豆諸島や駿河などに植えたが, 枯死 (九淵遺珠)。

		• <u>コガネヤナギ</u> (黄芩)	幕府の薬材調査のため、朝鮮より取り寄せ、江戸城などに植える。開花し、実を結ぶ (田代1999, 九淵遺珠)。
		• ニッケイ (肉桂)	清船が持ち渡った種子を駿府薬園に植え、のち小石川薬園にも分植 (小石川植物園草木目録附記)。➡1681~83
		• コカキツバタ (小杜若)	この頃、対馬より来る。紫花と黄花の2品がある (地錦抄附録)。後者はキンカキツバタか。➡1748
享保11	(1726)	• <u>サンザシ</u> (山査子)	本年刊の『用薬須知』に所収。
享保12	(1727)	• <u>マオウ</u> (麻黄)	幕府の薬材調査のため、朝鮮より取り寄せる (田代1999)。
		• <u>ホソバオケラ</u> (蒼朮) • <u>トウカエデ</u> (唐楓)	清船が持ち渡る (鷹峯官園雑記)。 花戸伊藤伊兵衛政武、深山楓に接木したトウカエデを、幕府から下賜される。深山楓は命で本年春に伊兵衛が献上したもの。以後、トウカエデが拡まる (新編武蔵風土記稿)。
享保13	(1728)	• <u>フウ</u> (楓) • <u>オオバナオケラ</u> (白朮) • <u>クロタネソウ</u>	清船が持ち渡る (庚戌雑録：『植物渡来考』に引用)。 本年、清船が持ち渡る (鷹峯官園雑記)。
享保16	(1731)	• <u>ナンキンハゼ</u> (烏白木)	幕府が蘭館に注文して取り寄せる (本草学と洋学)。 筑前国代官の献上品を駒場薬園に植える (駒場薬園有高帳)。
享保18	(1733)	• <u>ゴシユク</u> (呉茱萸) • <u>オランダセキチク</u> (あんじやべる)・<u>タマノカンザシ</u> (玉筴)	駿河薬園より駒場薬園に移植 (駒場薬園有高帳)。 本年刊の『地錦抄附録』に所収。「あんじやべる」は正保・万治年間 (1644~60) に渡来したがが絶え、近年また渡ると記す。
享保19	(1734)	• <u>サンザシ</u> (朝鮮種山査)	江戸城本丸より駒場薬園に移植 (駒場薬園有高帳)。
享保20	(1735)	• <u>ハボタン</u> (葉牡丹)	本年刊の『草木弄葩抄』に名が出る。➡1717
享保年間 (1716~35)		• <u>シクンシ</u> (使君子)・<u>チョウセンゴミシ</u> (北五味子)・<u>トウロウバイ</u> (檀香梅)・<u>ニンジンボク</u> (牡荊)・<u>ビャクブ</u> (百部) • <u>ハクセン</u> (白鮮) • <u>ハルウコン</u> (薑黄) • <u>ムラサキナツフジ</u> (醋甲サコウ：サクコウ)	享保年間に渡来 (異国草木会目録)。 享保年間に渡来 (資源植物事典, 本草の植物)。 琉球より渡来するが結実せず、拡まらずに終わる (新渡花葉図譜)。➡文化年間 (1804~17), 天保年間 (1830~43)
元文1	(1736)	• <u>モウソウチク</u> (孟宗竹, 江南竹) • <u>ゴヤバラ</u> (菩薩茨)・<u>サクラバ</u>・<u>サンザシ</u>・<u>ダンギク</u>・<u>チョウセンアザミ</u> (アーティチョーク)・<u>ヒイラギナンテン</u>	琉球から薩摩に2株入る (薩摩博物学史)。➡1771 近衛家熙予楽院 (本年没) 著『花木真写』に図がある。
元文3	(1738)	• <u>テンニンカ</u> (天人花)	本年作成の『筑前国産物絵図帳』に図がある。フトモモ科に属し、赤紫色の美しい花が咲く。琉球・台湾産。
寛保年間 (1741~43)		• <u>ギョリュウ</u> (櫻柳, 御柳)	清より渡来 (本草綱目啓蒙)。
延享3	(1746)	• <u>ハナカイドウ</u>	本年没した松岡玄達 (玄達) の著作『本草一家言』にある「八重海棠」はハナカイドウかという (四季の花事典)。 ➡1444

寛延 1	(1748)	● <u>ハリアサガオ</u> ● <u>キンカキツバタ</u>	「寛延ノ始メ薩州ノ商人……，携キタル」（本草綱目啓蒙）。 享保初年から本年頃まで描かれたらしい『東莞南畝識』にスケッチされている。朝鮮産，小型で黄色い花が咲く。
宝暦 6	(1756)	● トウガラシ	熊本藩主細川重賢編『百卉俵状』に，宝暦 6～9 年に描いたトウガラシの 51 品種が含まれている。
宝暦 8	(1758)	● <u>グツカコウ</u>（月下香，<u>阿蘭陀水仙</u>，ナフトール，夜来香）	田村藍水が長崎で入手。蘭名ナクトトル。「夕方から深夜まで香る」旨の記述がある（田村公用日記，明和 3 年 7 月 18 日条）。➡1827
宝暦 9	(1759)	● <u>キワタ</u>（古貝） ● <u>カンラン</u>（橄欖） ● <u>ズイカク</u>（薤核） ● <u>スイゼンジナ</u>（水前寺菜）	幕府注文の種子 2 万余が江戸に到着，諸州に蒔かせたが，発芽したものも冬の寒さで枯れた（洋名入草木図）。 漢種の種子が到来（物類品鑑）。 江戸で播種，発芽し，湯島の薬草会に出品（物類品鑑）。バラ科，中国産。 本年渡来（異国草木会目録）。熊本水前寺で古くから栽培されていたのが名の由来。熱帯アジア原産，キク科。
宝暦 10	(1760)	● <u>モッコウバラ</u>（白八重：木香花）	本年渡来（物類品鑑）。➡1849
宝暦 12	(1762)	● <u>オランダワレモコウ</u>	東都薬品会に「ビンプルネルレ」の名で出品。
宝暦 13	(1763)	● <u>キリンカク</u>（霸王鞭，麒麟角）	本年刊の『物類品鑑』に所収，「近世，琉球ヨリ来ル」と記す。トウダイグサ科，カナリア諸島原産。
明和 1	(1764)	● キョウチクトウ（夾竹桃）	「明和ノ初，琉球ヨリ来ル……重弁ノ者ハ安永中 [1772～80] ニ来ル」（山海庶品）。➡1713
明和 2	(1765)	● <u>オランダダンドク</u>（黄花壇特） ● <u>オオサンザシ</u>・<u>カクラシ</u>（鶴蘭）・<u>サンシュユ</u>・<u>シジミバナ</u>・<u>ドウカンソウ</u>・<u>ハゼノキ</u>・<u>ハナジオウ</u>（センリゴマ）・<u>ハナモモ</u>・<u>ハリアサガオ</u>	田村藍水が献上し，駒場薬園に植える（駒場御薬園植物目録）。ダンドクだが，黄色い花なので，オランダダンドク <i>Canna glauca</i>（牧野新日本植物図鑑）か。 本年刊の『花彙』に，左記の図がある／カクラシは琉球・中国・東南アジアに分布する／シジミバナ➡1709／ハナジオウ（花地黄），別名センリゴマ（千里胡麻）は中国原産らしい／ハリアサガオは学名 <i>Calonyction muricatum</i>。➡1748
明和 6	(1769)	● <u>オオバナアザミ</u>（漏蘆）	清船が持ち渡る（救荒本草通解）。
明和 7	(1770)	● <u>アスバラガス</u>（きじかくし一種） ● <u>ナンバンサイカチ</u>（阿勃勒）	清船が持ち渡る（本草鏡）。同定は『上野年表』による。 蘭船が種子を持ち渡り，田村藍水が蒔いて育てたが，冬の寒さで枯死（洋名入草木図）。
明和 8	(1771)	● <u>フウチョウソウ</u>（風蝶草） ● <u>ガジュマル</u>（かつまある） ● <u>モウソウチク</u>（孟宗竹）	本年，漢種が渡来（草樹纂説）。原記載は漢名「白花菜」。 明和末年に渡来し，安永中頃に江戸に入ったが，何処でも寒気に痛んだので，幕臣の朝比奈が唐室（一種の温室）を考案し，以来寒さも凌げるにいたった（草木錦葉集 3）。 明和末年には江戸にあったが，まだ珍しかった（塵塚談）。
安永 3	(1774)	● <u>ホンニツケイ</u>	本年か次年に渡来し，官園に植えたが，天明初年に寒さで枯れた（本草図譜 80，同解説）。

安永 4	(1775)	• <u>アスパラガス・サラダナ・タマ ネギ・パセリ</u>	本年来日したツェンベリーが、長崎に栽培されていると記す(江戸参府随行記: 平凡社東洋文庫訳本による)。
安永 5	(1776)	• <u>オウゴンソウ・グンバイナズナ</u>	本年帰国したツェンベリーの『日本植物誌』に所収。「オウゴンカ」「グンバイナズナ」の和名も添える。
安永 6	(1777)	• ニチニチソウ (<u>日々花</u>)	「安永中、琉球ヨリ来ル……安永六年、広ク四方ニ伝フ……寛政中、変ジテ白花ノ者出ヅ」(山海庶品)。➡1717
安永 7	(1778)	• <u>ソテツナ</u>	ハボタンの類で、蘭船が持ち渡る(本草図譜46解説)。
安永 8	(1779)	• <u>モウソウチク</u> (孟宗竹)	江戸品川の薩摩屋敷に薩摩から移植(武江年表)。その前に江戸に入っていたが、まだ珍しかった。➡1771
安永 9	(1780)	• <u>カマヤマシヨウブ</u> (<u>金山菖蒲</u>)	本年頃に記された『聚芳図説』に名が初出。アヤメの一変種で、別名リュウキュウアヤメ。➡1844
天明 4	(1784)	• <u>ホウサイラン</u> (<u>報歳蘭</u>)	琉球より薩摩に渡来(中山草木)。
天明 5	(1785)	• <u>ワンピ</u> (<u>黄枇</u>)	琉球より薩摩に渡来(中山草木)。ワンピはミカン科で、中国南部原産。
天明 6	(1786)	• <u>フウチョウソウ</u> (<u>風蝶草</u>)	石田幽汀(本年没)作の三好知恩寺の屏風に描かれている(植物文化史)。➡1771
寛政 1	(1789)	• <u>グンバイナズナ</u> • <u>トクサラン</u> (<u>トウチ克蘭</u> =唐竹蘭)	本年刊の辞書『雑字類編』に所収。ヨーロッパ原産。「寛政のはじめ、予[著者水野忠暁]が方にて布[斑入]出る」(草木錦葉集6)。「ラン」と付くが、ユリ科。
寛政 2	(1790)	• <u>ハズ</u> (<u>巴豆</u>)	琉球人が福建省で生木を入手、薩摩にもたらし、佐多菜園に植える(農経講義、成形図説43)。➡1721, 1827
寛政 4	(1792)	• <u>カコソウ</u> (<u>夏枯草</u>)	清船が実を持ち渡る(駒場菜園有高帳)。夏枯草は中国原産で、日本にも産するウツボグサはその亜種。
寛政 6	(1794)	• <u>ハブソウ</u> (<u>決明子</u> , <u>波夫草</u>)	本年成の『農経講義』に、琉球より渡り、諸方に栽培されていると記す。
寛政11	(1799)	• <u>トウツルモドキ</u> (<u>省藤</u>)	水谷豊文が摂州池田より京都に持ち来る(本草図譜32)。
寛政12	(1800)	• <u>テッポウユリ</u> • <u>リュウガン</u> (<u>竜眼</u>)	本年成の『本草綱目纂疏』に「琉球百合、一名鉄砲百合(関東)」と「テッポウユリ」の名が初出。➡1695
寛政年間 (1789~1800)		• <u>マメキンカン</u> (<u>金豆</u>)	薩摩山川菜園のリュウガン(➡1659)はみな育っていたが、寛政末年春の厳寒に枯れて絶える(農経講義)。「寛政年中渡ル」(本草要正)。
享和 2 (1801~03)	(1802)	• <u>ソケイ</u> (<u>素馨</u>) • <u>モウソウチク</u> (孟宗竹)	琉球より薩摩に渡る(品物考証)。 薩摩より近衛家に献上。うち2本を等持院村に植え、それから京都各地に拡がる(重修本草綱目啓蒙増補抄録)。➡1736, 1771, 1779
文化 1	(1804)	• <u>ウケユリ</u> (<u>承百合</u>)	本年刊『成形図説』に図説。奄美大島とその属島である諸島(うけじま)などにだけ自生する。
文化 2	(1805)	• <u>モダマ</u> • <u>イザヨイバラ</u> (<u>イザヨイバラ</u>) • <u>クマタケラン</u> (<u>高良薑</u>) • <u>センナリホオズキ</u> (<u>ホザキノイカリソウ</u>) (<u>唐種淫羊藿</u>) • <u>ワニグチモダマ</u>	紀伊の尾鷲に、種子や莢が多数漂着する(桃洞遺筆4)。 本年刊の『本草綱目啓蒙』に名が出る／イザヨイバラはこの和名の初出か／クマタケランは「先年、福州ヨリ種ヲ伝フル」／ホザキノイカリソウは「花戸ニ唐種ノ淫羊藿ト呼者アリ」。

文化 3	(1806)	● <u>セイヨウマツムシソウ</u> (スカヒ ヲサ)	蘭船が持ち込む (遠西舶上画譜 1)。
文化 6	(1809)	● <u>イセハナビ</u> ・ <u>オランダワレモコ ウ</u> (ヒンブルネルレ)・ <u>コウヨウ ザン</u> (広葉杉)・ <u>サクララン</u> ・ <u>ニ ュウメンラン</u> (入面蘭)・ <u>ノボタ ン</u> (野牡丹)	本年刊の『物品識名』に名が載る／イセハナビは中国 原産⇒1853／オランダワレモコウは「ピンブルネル ラ」などと呼ばれた／漢名の「杉」は本来コウヨウザ ンを指す。スギは中国に無く、日本特産／「入面蘭」 は琉球産、イリモテランともいう／野牡丹は琉球名。 設楽 (しだら) 妍芳が小株を入手 (蒲桃図説)。⇒ 1824
文化 9	(1812)	● <u>フトモモ</u> (蒲桃)	琉球より渡来。文化13年頃より各地に普及 (橘黄閑記, 草木育種)。
文化11	(1814)	● <u>センニンコク</u> (仙人穀, 別名ヒ モゲイトウ) ● <u>アンペラ</u> ・ <u>オランダワレモコウ</u> (ピンフルネル)・ <u>ソケイ</u> ・ <u>ダン チョウゲ</u> (段丁花)	江戸の縁日や薬園でこの年に見た草木の記録『名物勝 録』に記載されている (図は無い)。ピンフルネル⇒ 1809／ソケイ⇒1802／ダンチョウゲ⇒1824
文化12	(1815)	● <u>キズイセン</u> (ヒヤシンド, 黄水 仙)	前年長崎に入港した英船が持ち渡ったが、その球根を 役夫の清蔵が秘かに持ち出して拡まった (鍾奇遺筆 1)。
文化13	(1816)	● <u>ムラサキオモト</u>	琉球より薩摩へ渡来 (竹園草木誌, 異国草木会目録)。
文化14	(1817)	● <u>ジンコウ</u> (沈香)	清商が生木を長崎奉行に献上 (成形図説42, 橘黄閑記 12)。
文化年間 (1804~17)		● <u>シロツブ</u> ● <u>ハシカンボク</u> ● <u>ムラサキナツフジ</u> (醋甲)	岩崎灌園が「下種せしに二三の内一つ生ず」と記す (本草図譜84)。琉球を含む熱帯に分布する。 薩州より江戸に来る (芳園巡道録)。 「琉球産, 文化中舶来」(異国草木会目録)。⇒1716~ 35
文政 1	(1818)	● <u>オランダハッカ</u> ・ <u>カミルレ</u> ・ <u>サ ルビア</u> ・ <u>ルリハコベ</u>	幕府が蘭館に注文, 翌年~文政 8 年に渡来したなかに 左記の種類がある (洋船盆種移殖の記, 本草学と洋 学)。
文政 2	(1819)	● <u>種無しブドウ</u> (瑣々葡萄)	丹波亀山藩城代松平芝陽が, 松平定信より拝領する (瑣々葡萄: 物産叢書 4 に所収)。
文政 3	(1820)	● <u>ハルウコン</u> (薑黄)	山本読書室で初めて開花 (水谷記聞 6)。⇒1716~35
文政 5	(1822)	● <u>ホンキンセンカ</u> ● <u>ハナカイドウ</u> ● <u>ジオウ</u> (地黄) ● <u>センニンコク</u> (ヒモゲイトウ)	2 月, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・春 1)。⇒935 3 月 5 日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・春 1)。 4 月 1 日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・夏 1)。 6 月, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・夏 1)。⇒ 1814
文政 6	(1823)	● <u>センナリホオズキ</u>	6 月, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・夏 2)。⇒ 1805
文政 7	(1824)	● <u>サルビア</u> ● <u>アダン</u> (アナナス: 誤称) ● <u>キソケイ?</u> (黄花草薺) ● <u>フトモモ</u> (蒲桃) ● <u>ダンチョウゲ</u>	山本読書室物産会に出品 (同目録)。⇒1818 琉球より到来 (遠西舶上画譜 5)。 薩摩船が持ち込む (芳園巡道録)。 設楽妍芳が自宅に植えた樹が, 12 年目に初めて開花・ 結実した (蒲桃図説)。⇒1812 5 月 1 日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・夏 2)。 ハクチョウゲの一品種。⇒1814
文政 8	(1825)	● <u>ギョクチンラン</u> (玉沈蘭)・ <u>ソシ ンラン</u> (素心蘭)	5 月 21 日, 「山本読書室物産会」に出品 (同目録)。

		● <u>コリヤナギ・リュウキュウオウバイ・リュウキュウハンゲ</u> (琉球半夏)	本年刊行の『物品識名拾遺』にそれぞれの現和名が所収されている／コリヤナギの表記は初出か→1635／リュウキュウハンゲ→1829
文政9	(1826)	● <u>ムレスズメ</u> (金雀花)	3月10日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・春3)。
		● ギョリユウ (御柳)	4月14日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・夏3)。
文政10	(1827)	● ムラサキオモト ● <u>ゲッカコウ</u> (<u>月下香</u>, <u>ヨランダズイセン</u>) ● ハズ (巴豆) ● キリンカク・クネンボ・コクチナシ・サボテン・ザボン・トウジュロ (唐棕櫚)・トケイソウ・ニンジンボク・<u>ホウオウチク</u> (鳳凰竹)・ラカンマキ	4月16日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・夏4)。 閏6月29日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・夏4)。 →1758 薩摩の佐多薬園で初めて結実。→1790
		● キリンカク・クネンボ・コクチナシ・サボテン・ザボン・トウジュロ (唐棕櫚)・トケイソウ・ニンジンボク・<u>ホウオウチク</u> (鳳凰竹)・ラカンマキ	本年刊の『草木奇品家雅見』に, 左記種類の斑入などの変異品を所収。
文政11	(1828)	● <u>モクセイソウ</u> (木犀草, ニオイレセダ, <u>レセダ・オドラタ</u>) ● <u>キンリョウヘン</u> (<u>金稜辺</u>, ランの一様) ● コカキツバタ ● ソケイ ● <u>ゴモジユ</u>	蘭船が持ち渡る。学名は <i>Reseda odorata</i> (乙未本草会物品目録)。 「近来渡りたるよし。文政十一, 予〔著者水野忠暁〕は初て見る」(草木錦葉集6)。 4月15日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・夏5)。 11月16日, 毛利梅園が写生する (梅園草木花譜・冬)。 11月21日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・冬)。奄美大島・西表島などの固有種。巢鴨の花戸で写生。
文政12	(1829)	● <u>リュウキュウハンゲ</u> (琉球半夏) ● イザオイバラ ● トキンイバラ ● タマノカンザシ (<u>玉簪</u>) ● <u>カクラン</u> (鶴蘭)・<u>カラン</u> (花蘭)・<u>シコウラン</u>・<u>カンボウラン</u> (寒鳳蘭)・<u>ギョクチンラン</u> (<u>玉沈蘭</u>)・<u>ココンリン</u> (<u>古金輪</u>)・<u>ソシンラン</u> (素心蘭)・<u>ハクラン</u> (白蘭)・<u>ヤキバラン</u> (<u>焼刃蘭</u>, <u>金輪際</u>)・<u>カンツワブキ</u>・<u>クワズイモ</u>・<u>コウヨウザン</u> (広葉杉)・<u>サクララン</u>・<u>シマミサオノキ</u>・<u>ニッケイ</u>・<u>ハナヅルソウ</u>・<u>バンジロウ</u> (グアバ)・<u>ヒモスギラン</u>・<u>マルバニッケイ</u> ● ハシカンボク	4月14日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・夏5)。 4月16日, 毛利梅園が写生する (梅園草木花譜・夏5)。 4月24日, 毛利梅園が写生する (梅園草木花譜・夏5)。 5月24日, 毛利梅園が写生する (梅園草木花譜・夏5)。 本年刊『草木錦葉集』は斑入・矮化などの変異品や, 外来の奇品の図説で, 左記渡来種も所収されている／カクランは琉球・中国・東南アジアに分布する→1765／カランは一名リュウキュウエビネ <i>Calanthe masuca</i>／シコウランは奄美・琉球・台湾産／カンボウランからヤキバランまでは <i>Cymbidium</i> 属の蘭／ギョクチンラン, ソシンラン→1825／カンツワブキは屋久島・種子島産／コウヨウザン→1809／サクラランはガガイモ科／ニッケイ→1681→83／ハナヅルソウは南アフリカ産／ヒモスギランはシダ類。
文政年間 (1818~29)			文政初年に大坂に, ついで江戸に入り, 同11年には斑入品も現われた (草木錦葉集1)。 →文化年間 (1804~17)。 長崎より江戸に来る (本草図譜83)。 琉球種, 江戸に来る (本草図譜11)。 岩崎灌園が幕府に献上する (岩崎灌園由緒書)。ガジュツはショウガ科の植物。蓬莪茂ともいう。→1632
天保1	(1830)	● <u>トウサイカチ</u> ● <u>オオバナソケイ</u> (素馨) ● ガジュツ (莪茂)	

		● <u>カカヤンバラ</u> (現ヤエヤマノイバラ) ● <u>キンゴジカ</u> (金午時花)	ルソン島カカヤンに漂着した八丈島の船長儀平が種子を持ち帰る (草木奇花写真, 草図説木部 5・解説)。天保初年, 江戸巢鴨花戸斎田弥三郎が入手 (珍卉図説)。
天保 3	(1832)	● <u>マルバアサガオ</u> ● <u>トウアズキ</u> (相思子)	7月18日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・秋 4)。本年種子が持ち渡られ, 栽培に成功 (珍卉図説)。
天保 4	(1833)	● <u>ホザキノイカリソウ</u> (<u>淫羊藿</u>, 漢種白花) ● <u>ダンギク</u>	3月28日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・春 4)。 →1805
天保 6	(1835)	● <u>マルバタバコ</u> (黄花小烟草) ● <u>バラモンジン</u> (婆羅門参) ● <u>ワニグチモダマ</u> (鰐口藻玉)	9月2日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・秋 4)。「文政辛巳〔4年〕再琉舶来」と注記。→1709
天保 8	(1837)	● <u>サクララン</u>	6月10日, 山本読書室物産会に出品 (同目録)。 4月28日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・夏 6)。大坂で種子を購入し, それを蒔いたところ発芽。ただし, 開花にいたらず (珍卉図説)。→1805
天保 9	(1838)	● <u>キンゴウカン</u> (金合歡)	本年刊の『草木育種後編』に, 「琉球より来る」として, サクラランの栽培を詳しく述べる。→1809, 1829 摂津池田の花戸下村惣七郎が, 土岐備前侯より拝受 (鍾奇遺筆 5)。
天保10	(1839)	● <u>アスパラガス</u> (<u>アスヘルチイ</u>) ● <u>オランダハッカ</u> ● <u>キマメ</u> (木豆)	6月22日, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・夏 7)。この頃, 蘭船が持ち渡り, 各地に拡まる (重修本草綱目啓蒙・増補記事)。→1818
天保12	(1841)	● <u>スイセンアヤメ</u> ● <u>ダリア</u> (<u>天竺牡丹</u>, 纏枝牡丹, ラノンケル)	本年刊の『百品考』初編に, 「琉球より渡る」旨を記す。 本年渡来 (新渡花葉図譜)。 江戸花戸内山長太郎が, 濃紅花を大坂から買入れるが, 江戸で流行するまで数年を要した (百花培養集, →1842, 1846) / 天保12年は蘭船が入港していないので, 11年か, それ以前の持ち込みと思われる。次項のオジギソウも同じ。
天保13	(1842)	● <u>オジギソウ</u> (<u>コロイデイル・ルメイニイト</u>) ● <u>オランダセンニチ</u> (<u>セリヤーハン</u>, アルマモクト) ● <u>ダリア</u> (赤・黄・白の一重と赤八重)・<u>トウワタ</u> (唐綿)・<u>ハナカタバミ</u> (ヨキサリス)・<u>パンウコン</u> (蕃鬱金, <u>コンチョロ</u>) ● <u>トクサラン</u> (唐竹蘭)	長崎から京都・江戸へ到来 (屈佚草記, 新渡花葉図譜)。蘭船による持ち込みは天保11年か, それ以前。 →前項 尾張の伊藤圭介が, 長崎にいた弟子松崎寛一から種子を贈られ, 栽培する (雑纂249)。 左記の品を蘭船が持ち込む (遠西舶上画譜 1) / ダリアは 2度目の渡来か。→前年, 1846 / トウワタは, 『本草図譜』92も天保13~14年渡来とする / ハナカタバミは「オキサリス・ローザ」と呼ばれることが多かった。 12月15日, 山本溪愚が写生 (本草写生図譜 1)。→1789
天保14	(1843)	● <u>オランダカイウ</u> (和蘭海芋, <u>蛮海芋</u>, 現通称カラー) ● <u>カミルレ</u>	蘭船持ち渡りの葉草栽培箱の土に混入していた球根を, 長崎薬種目利野田青霞が植えて, 本品を得た (拾品考)。 蘭船が将来 (竹園草木図譜 2)。→1818

天保年間 (1830~43)	• <u>オランダフウロ・キンサンジコ</u> (金山慈姑)・<u>ジャガタラスイセン・シロノセンダングサ</u> (ドルレケルフル)・<u>トウキンセン</u> (唐金盞) • <u>オウコチョウ</u> (金鳳)・<u>ハナビシソウ</u> • <u>ムラサキナツフジ</u> (醋甲)	左記の種類が渡来する (遠西舶上画譜 1) / 現在のキンセンカは、トウキンセン。南欧原産である。➡935, 1849 / ジャガタラスイセンとキンサンジコ (金山慈姑) は琉球より入る。アマリリスは、これらを原種として作成した品種である。 この頃に渡来 (遠西舶上画譜 5・6)。オウコチョウ (黄胡蝶) は、ジャケツイバラやシロツブと同属のマメ科植物。 薩摩より渡る (新渡花葉図譜)。➡1716~35, 1804~17
弘化 1 (1844)	• キズイセン • <u>タマリン</u> • <u>アカネスイセン</u> (ボスメン一名ピツキ) • <u>オウゴンソウ・オオサンザシ</u> (朝鮮さんざし)・<u>オランダイチゴ</u>・<u>カマヤマショウブ</u>・<u>キンゴウカン</u>・<u>クロツグ</u>・<u>コンロンカ</u> (崑崙花)・<u>スイフヨウ</u> (酔芙蓉)・<u>テンノウメ</u> (天ノ梅)・<u>トウセンダン</u>・<u>ナンバンカンゾウ</u> (南蛮萱草)・<u>ノボタン</u>・<u>ハリナスビ</u>・<u>ボンテンカ</u> (梵天花)	2月18日, 毛利梅園が写生する (梅園草木花譜・春 2)。➡1815 夏, 高井氏が種子を蒔き, 育てる (本草写生図譜 2)。本年渡来 (異国草木会目録)。Eleutherine bulbosa, 南米産 (本草写生図譜 1 のアカネスイセン解説) 本年配布を終わった岩崎灌園著『本草図譜』に左記の品を所収 / オランダイチゴは「近年来る」 / カマヤマショウブ➡1780 / キンゴウカン➡1838 / 酔芙蓉は, 花が開く朝には白く, 昼に淡紅, 晩に紅色と変わるのが名の由来だが, その変化を写生。なお, この翌年に京都で開かれた異国草木会にもスイフヨウが出品されている (同目録) / テンノウメはバラ科, 琉球などに産する / トウセンダンは「長崎に大樹あり」と記するで, 渡来はかなり前であろう。
弘化 2 (1845)	• <u>パイナップル</u> (鳳梨) • <u>サフランモドキ</u> (蜜産山慈姑) • <u>ノウゼンハレン</u> (赤花)	蘭船が生木を持ち渡る (拾品考)。蘭名アナナスボーム。 前項パイナップルの栽培土に混入していた球根を薬種目利野田青霞が育てた (拾品考)。当時はサフランと誤認。 蘭船が持ち渡り (鍾奇遺筆 5), 翌年江戸に入って流行する (百花培養集)。
弘化 3 (1846)	• <u>オジギソウ</u> (ネムリソウ) • <u>ダリア</u> • <u>ジャガタラスイセン</u> (<u>ジャガタラ百合</u>) • <u>シロツメクサ</u> (クローバー) • <u>オオバノセンナ?</u> (<u>大葉センナ</u>)	6月27日, 毛利梅園が写生する (梅園草木花譜・夏 7)。 黄花一重咲・紅紫八重咲・紅絞り八弁の3品が, 大坂より江戸に入り, 嘉永元年 (1848) までに黄花八重咲・紅花一重咲が江戸で生じた (百花培養集)。➡1841, 1842 琉球より3根渡来 (百花培養集)。➡1830~43
弘化 4 (1847)	• <u>スイセンアヤメ</u> • <u>オランダワレモコウ</u>	オランダから幕府への献上品に詰物として使われていた枯れ草から, 種子を得て育てた。それが現和名「ツメクサ=詰草」の由来である (竹園草木図譜 21)。 蘭船が舶載する (拾品考)。 4月4日, 毛利梅園が写生する (梅園草木花譜・夏 7)。 4月, 毛利梅園が写生 (梅園草木花譜・夏 7)。➡1809

弘化年間 (1844~47)		• <u>ハルシャギク</u> (<u>ダリヤス</u>)	5月16日, 毛利梅園が写生する(梅園草木花譜・夏7)。俗称が「ダリヤス」で, ダリアと紛らわしい／天保14年(1843) 渡来という(白井光太郎著作集3)が出典不明。
		• <u>ツキミソウ</u>	本年渡来。京都で待宵草, 花戸では宵待草・夕化粧と称したという(遠西舶上画譜4, 雑纂108)。
		• <u>ギョボク</u> (<u>魚木</u>)	琉球より渡る(遠西舶上画譜5)。材が軽く柔らかいので, 擬似鯉の魚形を作るのが語源である。
		• レイシ	琉球より渡来, 安政元年(1854)に江戸で初めて千駄木花戸で開花, 結実した(遠西舶上画譜5)。→1659
		• 「<u>アマヲモルリスプル</u>」(ショウジョウカの一雑種)	弘化年間渡来(新渡花葉図譜)。イチビ(Abutilon)属ショウジョウカの雑種という(草木図説木部2解説)。
嘉永1 (1848)		• <u>フジゲイトウ</u> (<u>アマラント一種</u>)	弘化年間渡来(遠西舶上画譜4)。別名スギモトケイトウ, ホソアオケイトウ。アマラントは属名のAmaranthus。
		• <u>キンケイギク</u>	弘化年間渡来(雑纂33)。
		• <u>チョウジ</u> (<u>丁香</u>)・ビンロウ (<u>檳榔</u>)・ニッケイ・ヤシ	蘭船が生木を持ち渡る(拾品考)。
		• <u>ナンバンアカアズキ</u> (<u>海紅豆</u>)	蘭船が持ち渡る(拾品考)。
		• タケシマユリ • オランダフウロ • ノウゼンハレン (黄花)	5月2日, 毛利梅園が写生(梅園草木花譜・夏8)。 6月25日, 毛利梅園が写生(梅園草木花譜・夏8)。 江戸花戸内山長太郎が, 黄花を売り出す(百花培養集)。
嘉永2 (1849)		• <u>キバナハギ</u>	嘉永初年, 蘭船が持ち渡る(沙苑蒺藜考: 雑纂172所収)。
		• トウキンセン (唐金盞) • ノウゼンハレン (赤花)	3月22日, 毛利梅園が写生(梅園草木花譜・冬)。 6月10日, 毛利梅園が写生する(梅園草木花譜・夏8)。
		• <u>イチゲハマベズイセン</u> (<u>蘆薈</u>: 誤称)・<u>オオキンバイザサ</u> (<u>仙茅</u>)・<u>サフランモドキ</u> (<u>サフラン</u>: 誤認)	長崎奉行井戸対馬守が幕臣馬場大助に贈る(遠西舶上画譜4・5: 同定は『本草写生図譜』の北村四郎解説による)／サフランモドキ→1845
		• ハリナスビ (<u>苦茄</u>) • リュウガン (<u>竜眼</u>)	蘭船が種子を持ち渡る(百品考3上)。→1844, 1851 花戸森田六三郎が11年前に薩摩侯から下賜された実を育て, 江戸で初めて結実させる(竹園草木誌, 鍾奇遺筆6)。
		• <u>バンガジュツ</u>・<u>モッコウバラ</u> (<u>黄花</u>)	本年渡来(遠西舶上画譜4・5)／バンガジュツ(蕃莢朮)はKempferia rotunda／モッコウバラ→1760
嘉永3 (1850)		• <u>ベニスジアマリリス</u>	本年, 渡辺又日菴宅で開花(新渡花葉図譜)。
		• <u>マルバルコウ</u> (<u>ルコウアサガオ</u>)	本年渡来(奇品写生)。
		• <u>シロチョウマメモドキ</u> (<u>ドリコス</u>)・<u>マメアサガオ</u>	本年渡来(遠西舶上画譜4・5, 新渡花葉図譜)。シロチョウマメモドキはチョウマメに近縁で, スマトラ産。
嘉永4 (1851)		• ハリナスビ (<u>苦茄</u>)	山本溪愚が写生(本草写生図譜1)。→1844, 1849
		• <u>カエンソウ</u> (<u>火焰草</u>)・<u>ギダチトウガラシ</u>	蘭船が持ち渡る(遠西舶上画譜3)。

		- キダチチョウセンアサガオ・<u>チヨウマメ</u> (キリトリア)・<u>ツルナシナタマメ</u>・<u>ベゴニア</u>・<u>マツヨイグサ</u>・<u>マンテマ</u>・<u>ロゼルソウ</u> - トコロアオイモドキ? (<u>アベルモスユス</u>)・<u>ナンバンタヌキマメ</u> (<u>コロッタルラリア</u>) <u>シュクシヤ</u> (宿砂, <u>ガラंगा</u>) <u>ハサボテン</u> (<u>ハボテン</u>)	本年渡来 (竹園草木誌, 竹園草木図譜22, 植物渡来考) / ロゼルソウは Hibiscus 属の草で, 熱帯アフリカの原産だが, 熱帯に広く栽培され, 食用・繊維用に供される。 蘭船が種子を持ち渡る (遠西舶上画譜4)。
嘉永5	(1852)	<u>ギンケマル</u> (<u>ギンデマリ</u>: サボテン)・キンゴウカン (<u>黄花合歓</u>) <u>ナンバンクサフジ</u> (<u>エゴイテン</u> <u>パートツリ</u>)・<u>モクワンジュ</u>	本年渡来 (新渡花葉図譜)。⇒1853 本年か次年に渡来 (新渡花葉図譜)。 本年渡来 (新渡花葉図譜)。キンゴウカン⇒1838
		<u>マイハギ</u> (舞萩, <u>ゲイラン</u>) <u>ハクサイ</u> (白菜, <u>唐菰</u>)	6月, ともに開花 (新渡花葉図譜) / 『草木図説』14 はナンバンクサフジの俗称をエゴイランタータツリとする。
嘉永6	(1853)	<u>サンゴバナ</u> (<u>ユスデシヤカンネヤ</u>) <u>イセハナビ</u>・<u>キバナハギ</u>・<u>パイナップル</u> (鳳梨) <u>ギンゴウカン</u> (白花合歓) <u>ニクイロシュクシヤ</u> (<u>ガラंगा</u>, <u>良薑</u>)	本年渡来。舞草ともいう (遠西舶上画譜3)。 唐船が持ち渡る。「葉ヲ卷テ生ス」の説明がある (遠西舶上画譜3)。 長崎通詞北村元助が, 馬場大助に贈る (遠西舶上画譜3)。当時の学名 <i>Justicia carnea</i> から, 「ユスデシヤ・カンネヤ」「イユスチシア」などと呼ばれた。
		<u>キアイ</u> (木藍, <u>レプタスタシア</u>) <u>アカバナレンゲ</u> (<u>ケレイネ</u>・<u>ドンドルバールト</u>) - リュウガン	本年刊『百品考』三編に記事がある。イセハナビ⇒1809 / キバナハギ⇒1848 / パイナップル⇒1845 蘭船が持ち渡る (新渡花葉図譜)。 本年渡来した (新渡花葉図譜)。⇒1851
嘉永年間	(1848~53)		本年渡来 (遠西舶上画譜3)。 嘉永年間に渡来した (草木図説8)。学名は <i>Echeveria lurida</i> (本草写生図譜2の「ケレイネドンドロ」解説)。 江戸で初めて千駄木花戸で開花・結実 (遠西舶上画譜5)。
安政1	(1854)	<u>オオアザミ</u> <u>アザミヤグルマ</u>・<u>オクラ</u>・<u>ヨルガオ</u> - オクラ	「嘉永年間, 初テ得之」(草木図説15)。地中海沿岸原産。 ペリー艦隊が種子を持ち渡る (遠西舶上画譜3)。
			秋, 駿府奉行貴志忠美が江戸より種子を贈られ, 翌2年に蒔いたところ, 開花し, 細長い実が生じた (本草写生)。
安政2	(1855)	<u>キアイ</u> (<u>レフダスタシア</u>)・<u>チヨウマメ</u> (<u>キリトリヤ</u>)・<u>ナンバンタヌキマメ</u> (<u>スズナリヤ</u>) <u>イモカタバミ</u>? (<u>ヒメヲキザリ</u>)・<u>オオセンナリ</u>・<u>シロバナソシンカ</u> (<u>コンタラエルハ</u>)	5月21日, 山本読書室物産会に出品 (同日録)。
安政3	(1856)	<u>カンナ</u> (黄花)・<u>キンギョソウ</u>	本年渡来 (遠西舶上画譜2)。
安政4	(1857)	- サボテン7~8品: 「<u>ユレイユイ</u> <u>ネテイ</u>, <u>エテカツテエフス</u>, <u>ライフルエメシキ</u>・<u>メコアカンナ</u>, <u>アカラシネラ</u>」など <u>グラジオラス</u> (<u>ナガルボーム</u>)	本年渡来, いずれも異形 (重修本草綱目啓蒙増補抄録16)。
安政5	(1858)	<u>クリナム</u>の一種 (<u>曇花</u>)	本年渡来 (新渡花葉図譜)。 本年渡来 (遠西舶上画譜4)。白花, 花卉中央に赤筋。

		• <u>フクシア</u> • <u>トキワギョリュウ</u> (<u>テンネボーム</u>, <u>カシユアリナ</u>) • <u>ハナキリン</u> (<u>エーホルヒウム</u>)	本年渡来 (遠西舶上画譜3)。 種子が長崎に到来 (白井年表)。トキワギョリュウ (常磐御柳) は <i>Casuarina equisetifolia</i>, オーストラリア産。 本年渡来し, 摂津池田より尾張に来る (新渡花葉図譜)。『遠西舶上画譜』3も渡来は本年とする。原記載名は属名 <i>Euphorbia</i> に由来する。 7月, 山本溪愚が写生 (本草写生図譜2)。 本年渡来 (遠西舶上画譜3)。
安政6	(1859)	• <u>ハウチワマメ</u> (<u>リュプニユス</u>) • <u>アロエ</u> (<u>カイマンゴロウ</u>)・<u>リュウゼツラン</u> (龍舌蘭) • <u>オロチ</u> (大蛇, <u>カシノカントリス</u>)・<u>タンケマル</u> (短毛丸, <u>トイフルスメルキ</u>)・<u>サクラキリン</u> (<u>ダーラケンフルトス</u>:以上サボテン類)・<u>パンマツリ</u> (蜜茉莉, <u>セイテラボーム</u>)	本年3月成の『天保度後蜜舶来草木銘書』には, 左記の名が挙がっている。
安政年間	(1854~59)	• <u>イトラン</u> (糸蘭, <u>ユツコウ-フラチデ</u>) • <u>ルリヤナギ</u> • <u>カセイマル</u> (花盛丸)	安政年間に長崎から江戸に入り, 文久3年 (1863) には開花した (物産宝庫)。 長崎の薬目利野田青霞が飯沼慾斎に種子を贈る。近年の渡来という (草木図説木部2)。 左のサボテンが舶来 (草木図説木部4)。舶来年代は不明だが, 同書にはサボテン類の<u>ホウケン</u> (宝剣) や <u>コクリュウ</u> (黒竜) も描かれており, これらも持ち込まれていた。
万延1	(1860)	• <u>アカツメクサ</u>・<u>アザミゲシ</u>・<u>ウスベニカノコソウ</u>・<u>カッコウアザミ</u>・<u>キキョウナゲシ</u>・<u>キヤベツ</u>・<u>コムギセンノウ</u>・<u>サトウダイコン</u>・<u>ジギタリス</u>・<u>シュツコシアマ</u>・<u>スイートピー</u>・<u>タマネギ</u>・<u>ナツザキフクジュソウ</u>・<u>ネモフィラ</u>・<u>ハイナス</u>・<u>パンジン</u>・<u>ヒヤクニチソウ</u>・<u>ペチュニア</u>・<u>ベニナガナ</u>・<u>ベニバナツメクサ</u>・<u>ホソバナサンジソウ</u>・<u>マツバボタン</u>・<u>マヨラーナ</u>・<u>ムギワラギク</u>・<u>メキヤベツ</u>・<u>ヤグルマギク</u>・<u>ヤハズカズラ</u>・<u>ラズベリー</u>・<u>ラベンダー</u>・<u>ワタ</u> (<u>リクチメン</u>) / <u>パーベナ</u>・<u>ファセリア</u>・<u>ベニバナインゲン</u> • <u>アカバナレンゲ</u> (<u>ケレイネ-ドン</u> <u>ドルハアル</u>) • <u>キチュウジ</u>類 (黄丁字, <u>セレイテイヤ</u>)	9月, 遣米使節が種子を持ち帰ったなかに左記の新来品がある (遠藤2000~01:ただし, 最後の3品は遠西舶上画譜2・6による) / <u>タマネギ</u>→1775 / <u>マヨラーナ</u>はハナハッカ属の <i>Origanum majorana</i> / 左記は持ち帰り品の一部にすぎない (詳細→上記報文)。また, 普及は明治時代以降の場合が多い。
			本年渡来 (遠西舶上画譜4)。→嘉永年間 (1848~53)
			江戸より尾張に入る (新渡花葉図譜)。
文久1	(1861)	• <u>キンケマル</u> (<u>キンデマリ</u>)・<u>ナンテンソケイ</u> (南天素馨)	本年渡来 (新渡花葉図譜)。キンケマル (金毛丸) はサボテン類。

		● <u>シラボシベゴニア</u> (エーケンベ ルラア) ● <u>キバナルピナス</u> (サラタラリヤ) ● <u>キクイモ</u>	尾張に来る (新渡花葉図譜)。葉の表側に白星が散在し、裏側が紅色のベゴニア。 アメリカより渡来 (雑纂33)。 本年あるいは次年、英公使オールコックが英国仮公使館の高輪東禅寺に植える (雑纂211)。
文久2	(1862)	● <u>カリフラワー・レタス</u> ● <u>アメリカチョウセンアサガオ・アリッサム・アルファルファ・イロマツヨイ・キリカズラ・クロタネソウ・ユウカサスマツムシソウ・ヨキリカズラ・ユスモス・サクラマンテマ・サルメンバナ・サンシキヒルガオ・ナツシロギク・ハカマオニゲシ・ハクチョウソウ・ハナアオイ・ハリエニシダ・ヒエンソウ・ヒメキンギョソウ・ヒロハノハナカシザシ・フウリンソウ・フレンスギク・ベニカノコソウ・ベニバナアマ・ヘビウリ・マグリバナ・ムシトリナデシコ・ムレゴチョウ・モモイロタンポポ・ユウギリソウ・ルピナス・ルリハツカ・ワスレナグサ</u> ● <u>ヨウシュチョウセンアサガオ</u> (イガホウツキ=イガホオズキ) ● <u>サンジソウ</u> (山字草, ホスホラカウテルバランカ)	9月、米公使が64品の農作物種子を献上。そのなかに左記の種類がある (原1943)。 12月、遣欧使節が250種を超える種子類を持ち帰る (遠藤 2000~01: キリカズラは『雑纂』21, ヒロハノハナカンザシは同241による)。そのうちの代表的な新来・再来品を 左欄に挙げた。ただし、前々年の遣米使節持ち帰り品と重複するものは省いている／クロタネソウは古く享保13年 (1728) に蘭船で種子が持ち込まれたとの記録があるが、それ以降の園芸書には記事が載らないので、ほどなく絶えたらしい。したがって、本年は再来／ムシトリナデシコは「虫取り」の名はつくが、食虫植物ではない／遣米使節の持ち帰り品 (→1860) と同じく、左記は持ち帰り品の一部のみである。また、大半は明治時代以降に普及。
文久3	(1863)	● <u>チューリップ</u> ● <u>アメリカナデシコ</u> (エイケンラシヤ, ビジョナデシコ)・<u>カーネーション</u>・<u>ツタバキリカズラ</u> (蔦葉桐葛, バークラヤナ)・<u>モミジアオイ</u> (紅葉葵) ● <u>オガサワラビロウ?</u>・<u>シマニシキソウ</u>・<u>タコノキ</u>, <u>バナナ</u> ● <u>クリカボチャ</u>・<u>米国種ヒマ</u> ● <u>ハナカンザシ</u> ● <u>サフラン</u> ● <u>オリーブ</u>	本年渡来 (新渡花葉図譜)。 江戸より尾張に入る (新渡花葉図譜)。本種やホソバノサンジソウの花弁が「山」字型に三裂するのが「山字草」の名の由来か。 フランスより球根が渡る (雑纂49)。 本年渡来 (新渡花葉図譜)。カーネーション→正保・万治年間 (1644~60) / 「バークラヤナ」はツタバキリカズラの現種小名 barclaiana に由来する名。
文久年間 (1861~63)			小笠原諸島より持ち帰る (遠西舶上画譜 5・6 / バナナ→雑纂24)。タコノキ→1675 初めて渡来 (資源植物事典)。天正~慶長の頃に伝わったカボチャはニホンカボチャとされる。 伊藤圭介が種子を蒔く (雑纂33)。 フランスより球根が渡る (雑纂191)。 相模国横須賀で試験栽培するが、失敗 (資源植物事典)。
元治1	(1864)	● <u>セイヨウリンゴ</u> ● <u>キンケイギク</u>・<u>フウリンソウ</u> ● <u>テンジクアオイ</u> (天竺葵, ゼラニウム)・<u>モンテンジクアオイ</u> (紋天竺葵, ゼラニウムの類)	この頃に渡来、江戸に植える (本草の植物)。 江戸より尾張に来る (新渡花葉図譜)。→1862 摂津池田より尾張に入る (新渡花葉図譜)。

慶応 1	(1865)	● <u>モクキリン</u> (木キリン)	摂津池田より尾張に来る (新渡花葉図譜)。サボテン類。
慶応 2	(1866)	● <u>ベニバナサルビア</u> ● <u>イセハナビ</u>・<u>キクバテンジクア</u> <u>オイ</u> (菊葉天竺葵, <u>ゼラニウム</u> 類)・<u>サンユウカ</u> (三友花)・<u>ハクチョウソウ</u>・<u>パンジー</u>	渡辺又日菴が花戸から入手 (新渡花葉図譜)。近年渡来した左の種類が尾張に来る (新渡花葉図譜) / イセハナビは19世紀初頭までに持ち込まれていた (⇒1809) が, 再渡来したようである。「伊勢」を冠するが, 中国産。
慶応 3	(1867)	● <u>ヒアシンス</u> (<u>フシヤシントウ</u>) ● <u>イボサボテン</u>・<u>キンチャクサボテン</u>・<u>ヒメサボテン</u>・<u>ヒモサボテン</u>・<u>ニオイイリス</u> ● <u>オニゲシ</u> (通称オリエンタル・ポピー)	本年渡来, 淡紫・橙色の2品 (新渡花葉図譜)。⇒次年パリ万国博覧会に出席していた田中芳男が持ち帰る (物産宝庫1・3)。
明治 1	(1868)	● <u>ツバメズイセン</u> (燕水仙) ● <u>クリアンサス</u>・<u>プニケウス</u>・<u>チャボツキミソウ</u>類・<u>テンニンギク</u>・<u>ドデカテオン</u>・<u>ハツユキソウ</u>・<u>ビオラ</u>・<u>ルテア</u>・<u>ヒナギク</u>・<u>マツバナデシコ</u>・<u>マユハケオモト</u>・<u>ローレア</u>・<u>ベスペルチリオニス</u>	尾張に入る (新渡花葉図譜)。明治改元の2日後に没した馬場大助の『遠西舶上画譜』には, 既出例以外に渡来年不明の左記諸品が描かれている / <u>クリアンサス</u> ・ <u>プニケウス</u> (<i>Clianthus puniceus</i>) はマメ科で, 花は旗弁と竜骨弁が反対側に長く延びた特異な形を示す / <u>ドデカテオン</u> はシクラメンの近縁種 / <u>ローレア</u> ・ <u>ベスペルチリオニス</u> (<i>Lourea vespertilionis</i>) は, 竹とんぼ型の紫がかった葉をもつマメ科の蔓草。一名, 飛行機草。

文献

- 『国書総目録』や日本史事典類, 拙著『日本博物誌年表』などに古和書の所蔵館, 影印本・翻刻本の出版社を記してある文献は, 多出する場合や, 略号を用いた例などを除き, 原則として省略した。
- ⇒の後には正式な書名・報文名, ⇨の後には関連文献や所収資料などを記す。

異国草木会目録, 高井正芳・賀島近信編 ⇨白井年表, 弘化2年項

蔭涼軒日録 (いんりょうけんにちろく), 続史料大成, 臨川書店

色葉字類抄 (3巻本) ⇨中田祝夫・峯岸 明, 色葉字類抄研究並びに総合索引 (黒川本影印篇), 風間書房

岩崎灌園由緒書 ⇨本草百家伝, 白井光太郎著作集6, 科学書院

上野年表⇒上野益三, 年表日本博物学史, 八坂書房

遠西舶上画譜, 馬場大助, 東京国立博物館蔵

御薬草木書留 (寛政三年改), 小石川御薬園作成 ⇨日本薬園史の研究

お湯殿の上の日記, 続群書類従・補遺3, 続群書類従完成会: 翻刻 ⇨磯野直秀 (2006)

下学集 (永禄2年本) ⇨下学集・三種, 東京大学国語研究室資料叢書14, 汲古書院: 影印

花壇綱目 (初稿写本), 水野元勝, 国会図書館蔵

花壇地錦抄, 伊藤伊兵衛三之丞, 八坂書房: 翻刻

- 花木園芸, 宮沢文吾, 八坂書房: 復刻版
- 花木真写, 近衛予楽院, 北村四郎解説, 淡交社: 影印 ⇨植物文化史
- 花譜・菜譜, 貝原益軒, 八坂書房: 翻刻
- 婦化植物, 久内清孝, 科学図書出版社
- 九淵遺珠, 丹羽正伯, 岩瀬文庫・杏雨書屋蔵
- 草花絵前集, 伊藤伊兵衛三之丞, 平凡社東洋文庫: 翻刻
- 屈佚草記, 山本榕室 ⇨指佞草ノ記, 国会図書館蔵
- 広益地錦抄, 伊藤伊兵衛政武, 八坂書房: 翻刻
- 古典植物辞典, 松田 修, 講談社
- 言継卿記➡ときつぐ……
- 駒場薬園有高帳➡駒場御薬園御薬草木当時御有高帳, 享和元年改/天保二年改, 国会図書館蔵
- 雑纂➡植物図説雑纂, 伊藤圭介・伊藤篤太郎編, 国会図書館蔵
- 薩摩博物学史, 上野益三, 島津出版会: 出典を詳しく記してある
- 山海庶品, 佐藤成裕, 国会図書館蔵: 特7-18
- 四季の花事典, 麓 次郎, 八坂書房
- 地錦抄附録, 伊藤伊兵衛政武, 八坂書房: 翻刻
- 資源植物事典, 柴田桂太編, 北隆館
- 拾品考, 野田青葭, 国会図書館ほか蔵: 刊本
- 鍾奇遺筆, 岩永文禎, 国会図書館蔵
- 諸禽万益集, 左馬之助, 国会図書館ほか蔵: 後書に草木の名称を列挙した個所がある
- 植物渡来考, 白井光太郎, 岡書院
- 植物文化史, 北村四郎, 保育社
- 白井年表➡[改訂増補]日本博物学年表, 白井光太郎, 大岡山書店
- 新渡花葉図譜, 渡辺又日菴, 国会図書館蔵 ⇨磯野 (2007)
- 成形図説 (巻1~30), 曾 占春など編, 国本出版社, 影印: 巻31~45は写本で伝わる
- 草花図譜, 著者不明, 東京国立博物館蔵: 和1033
- 草木花写生図巻, 狩野探幽, 東京国立博物館蔵 ⇨植物文化史
- 草木錦葉集, 水野忠暁著, 北村四郎ほか解説, 青青堂: 影印+解説
- 草木写生, 狩野重賢, 国会図書館蔵 ⇨磯野 (2004B)
- 草木図説 (草部) ➡草木図説, 飯沼慾斎, 永楽屋東四郎版, 国会図書館蔵
- 草木図説 (木部), 飯沼慾斎著, 北村四郎解説, 保育社: 図の影印+文の翻刻 ⇨花の研究史
- 鷹峯官園雑記 ⇨「鷹峯官園雑記」, 宗田 一, 医薬ジャーナル, 30巻10号
- 田村公用日記, 田村藍水・田村西湖, 続群書類従完成会: 翻刻
- 竹園草木誌➡朝暎集, 貴志忠美, 冊8 (冊題, 竹園草木誌), 国会図書館蔵
- 竹園草木図譜, 貴志忠美, 岩瀬文庫蔵
- 常信写生図巻➡草花魚貝虫類写生図, 狩野常信, 東京国立博物館蔵 ⇨磯野 (2004A)

- 中山草木 ⇨質問草木略, 曾 占春, 国会図書館蔵
- 天保度後蚕舶来草木銘書 ⇨日本園芸史, 白井光太郎著作集 3, 科学書院: 原本は『花形簿』
(編者未詳, 国会図書館蔵) に所収
- 桃洞遺筆, 小原桃洞, 恒和出版: 影印
- 言継(ときつぐ)卿記, 山科言継, 国書刊行会編, 続群書類従刊行会: 翻刻 ⇨磯野(2006)
- 日葡辞書➡[邦訳] 日葡辞書, 土井忠生ほか編訳, 岩波書店/[邦訳] 日葡辞書索引, 森田武
編, 岩波書店
- 日本物産年表, 田中芳男, 十文字商会
- 日本薬園史の研究, 上田三平著・三浦三郎編, 渡辺書店
- 農業事物起源集成, 大野史朗, 青史社
- 梅園草木花譜, 毛利梅園, 国会図書館蔵
- 花の研究史, 北村四郎, 保育社
- 百花培養集, 松平定朝, 嘉永元年序本, 国会図書館蔵: 特1-486
- 百品考, 山本亡羊, 科学書院: 影印
- 物産宝庫, 田中芳男, 国会図書館蔵
- 物品識名・物品識名拾遺, 水谷豊文, 青史社: 影印
- 物類品隲, 平賀源内, 平賀源内全集, 名著刊行会: 翻刻
- 文明本節用集➡文明本節用集研究並びに索引, 中田祝夫・小林祥次郎, 勉誠社: 影印
- 本草学と洋学, 遠藤正治, 思文閣出版
- 本草綱目啓蒙(重訂版), 小野蘭山, 平凡社東洋文庫: 翻刻
- 本草綱目纂疏, 曾 占春, 国会図書館ほか蔵
- 本草写生, 貴志忠美, 国会図書館蔵: 特1-3309
- 本草写生図譜, 山本溪愚著, 北村四郎解説, 雄渾社: 影印 ⇨植物文化史
- 本草図譜, 岩崎灌園著, 北村四郎解説, 同朋舎出版: 影印 ⇨本草図譜総合解説, 北村四郎ほ
か, 同朋舎出版/花の研究史
- 本草の植物, 北村四郎, 保育社
- 本朝世事談綺, 菊岡沾涼, 日本随筆大成, II-12, 吉川弘文館: 翻刻
- 松平大和守日記, 松平直矩, 日本庶民文化史料集成, 第12巻, 三一書房: 翻刻
- 水谷記聞➡本草綱目記聞, 水谷豊文, 杏雨書屋蔵(原本)・国会図書館蔵(部分, 転写本)
- 明月記, 藤原定家著, 今川文雄訓読, 河出書房新社
- 山科家礼記(やましなけらいき), 史料纂集 1, 続群書類従完成会: 翻刻 ⇨磯野(2006)
- 大和本草, 貝原益軒, 有明書房: 翻刻
- 洋舶盆種移植の記, 宇田川榛斎 ⇨植物渡来考・付録: 翻刻
- 落葉, 北村四郎, 保育社
- ラホ日辞典➡ラホ日辞典の日本語, 金沢大学法文学部国文学研究室編, ラホ日辞典索引刊行会
和漢三才図会, 寺島良安, 平凡社東洋文庫: 翻刻

- 磯野直秀 (1997), 日本博物学史覚え書 5, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 22号
- 磯野直秀 (2002), 日本博物誌年表, 平凡社
- 磯野直秀 (2004A), 博物誌資料としての『草花魚貝虫類写生図』, MUSEUM (東京国立博物館研究誌), 590号
- 磯野直秀 (2004B), 狩野重賢画『草木写生』, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 36号
- 磯野直秀 (2006), 博物誌資料としての『お湯殿の上の日記』, 慶應義塾大学日吉紀要・自然科学, 40号
- 磯野直秀 (2007), 『新渡花葉図譜』: 幕末渡来植物の一資料, 参考書誌研究, 67号
- 遠藤正治 (2000~01): 遣米・遣欧使節のもたらした植物についての下記報文を参照。
- 遠藤正治 (2000), 遣米・遣欧使節齎来の植物を記載した「草木図説遺稿」の発見, 悠斎研究会だより, 90号
- 遠藤正治 (2000), 悠斎が山本榕室に贈った遣米使節齎来の植物, 悠斎研究会だより, 91号
- 遠藤正治 (2001), 悠斎が山本榕室に贈った遣欧使節齎来の植物, 悠斎研究会だより, 93号
- 遠藤正治 (2001), 伊藤圭介が大河内家に送った植物, 伊藤圭介日記, 第7集, 東山植物園
- 榊原吉郎 (1995), 十八世紀の植物写生, 『東アジアの本草学と博物学の世界』, 思文閣出版
- 田代和生 (1999), 朝鮮薬材調査の研究, 慶應義塾大学出版会
- 原 平三 (1943), 蕃書調所の科学及び技術部門に就て, 帝国学士院紀事, 2巻3号

謝辞

本年表の作成に当っては, 遠藤正治氏, 小笠原 亮氏, および故岩佐吉純氏から多くの御教示を頂きました。この場を借りて, 厚く御礼を申し上げます。

植物名索引

品名欄・注記欄に記載した品名の
掲出年を挙げた。また、たとえば
1818～29は文政年間を示す。下線
を付した場合は、注記欄に記載。
品名では、**キ**⇒**イ**、**エ**⇒**エ**、**ヲ**⇒
オと変えてある。

アオギリ 1481, 1666
アカツメクサ 1860
アカネスイセン 1844
アカバナレンゲ 1848～53, 1860
アサガオ 914
アザミゲシ 1860
アザミヤグルマ 1854
アズキ 712
アスパラガス 1770, 1775, 1839
アダン 1823
アーティチョーク 1736
アナナスポーム⇒パイナップル
アブラギリ 1658～60
アブラナ 918, 1181, 1592
アフリカン・マリーゴールド
1664
アマ 1688～1703
アマオマモルリスブル 1844～47
アマリリス 1830～43
アメリカチョウセンアサガオ
1862
アメリカナデシコ 1863
アラセイトウ 1660
アリッサム 1862
アルファルファ 1862
アロエ 1859
アンジャベル 1644～60, 1733
アンズ 914
アンペラ 1814
イガホオズキ 1862
イカリソウ (漢種) 1805
イザヨイバラ 1709, 1805, 1829
イステサガシネヤ⇒サンゴバナ
イセハナビ 1809, 1853, 1866
イチゲハマベズイセン 1849
イチジク 1619, 1631
イチハツ (一八) 1500
イチビ 918
イチョウ 1444
イトラン (糸蘭) 1854～59

イボサボテン 1867
イモカタバミ 1855
イユスチシア 1853
イリモテラン (入面蘭) 1809
イロマツヨイ (色待宵) 1862
ウケユリ (承百合) 1804
ウコン (鬱金) 1662
ウスベニカノコソウ 1860
ウチワサボテン 1717
ウツボグサ 1792
ウメ 705
ウルシ 720
エイケンラシヤ 1863
エーケンベルラア 1861
エゴイテンバークツリ 1852
エゴイランターツリ 1852
エゾギク 1719
エニシダ 1673～80, 1697
エンジュ (槐) 918
エンダイブ 1714
エンドウ 1181
オウコチョウ (黄胡蝶) 1830～43
オウゴン (黄芩) 1725
オウゴンソウ (黄金草) 1776,
1844
オウバイ (黄梅) 1488, 1666
オオアザミ 1848～53
オオキンバイザサ 1849
オオグルマ 1709
オオケタデ 1666
オオサンザシ 1765, 1844
オオセンナリ 1855
オオバナアザミ 1769
オオバナオケラ 1728
オオバナソケイ 1818～29
オオバノセンナ 1846
オガサワラビロウ 1863
オキザリスローザ 1842
オクラ 1854
オグラギク 1665
オジギソウ 1842, 1846
オシロイバナ 1698, 1699
オニゲシ 1867
オニマユハキ 1672
オニユリ 1492
オランダイチゴ 1844
オランダカイウ (海芋) 1843
オランダスイセン 1758, 1827

オランダセキチク 1644～60,
1733
オランダゼリ 1709
オランダセンニチ 1842
オランダダンドク 1765
オランダチシヤ 1714
オランダハッカ 1818, 1839
オランダフウロ 1830～43, 1848
オランダミツバ 1598
オランダワレモコウ 1762, 1809,
1814, 1847
オリエンタル・ポピー 1867
オリーブ 1595, 1861～63
オロチ (大蛇) 1859
カイコウズ (海紅豆) 1848
カイドウ (海棠) 1444
カイマングロウ 1859
カエンソウ (火焰草) 1851
カカヤンバラ 1830
カキ 758
カクラン (鶴蘭) 1765, 1829
カコソウ (夏枯草) 1792
カザグルマ 1631, 1645, 1702
カジノキ 918
ガジュツ (莪茂) 1632, 1830
ガジュマル 1771
カセイマル (花盛丸) 1854～59
カッコウアザミ 1860
カーネーション 1644～60, 1863
カボチャ 1579, 1608, 1674
カボチャ (クリカボチャ) 1863
カマヤマショウブ 1780, 1844
カミルレ, 1818, 1843
カラー 1843
カラタチ 785
カラナデシコ (石竹) 1001
カラン (花蘭) 1829
ガランガ 1851, 1853
カリフラワー 1862
カリン 1400
カワタケ (川竹) 935
カンゾウ (萱草) 785
カンツワブキ 1829
カンナ 1856
カンノンチク 1688
ガンピ (ナデシコ科) 1490
カンボウラン (寒鳳蘭) 1829
カンボタン (寒牡丹) 1663

- カンラン (橄欖) 1759
 キアイ (木藍) 1853, 1855
 キキョウナデシコ 1860
 キク 751, 1674
 キクイモ 1861
 キクイバラ 1698
 キクヂシャ 1714
 キクバテンジクアオイ 1866
 キササゲ 1666
 キズイセン 1815, 1844
 キソケイ (黄素馨) 1824
 キダチチョウセンアサガオ 1851
 キダチトウガラシ 1851
 キチョウジ (黄丁字) 1860
 キバナハギ 1848, 1853
 キバナルビナス 1861
 キバラ (黄薔薇) 1709
 キブネギク (貴船菊) 1500
 キマメ (木豆) 1839
 キャベツ 1860
 キュウリ 784
 キョウオウ (薑黄) 1716~35
 キョウチクトウ 1713, 1764
 ギョクチンラン (玉沈蘭) 1825, 1829
 ギョボク (魚木) 1844~47
 キヨマサニンジン 1598
 ギョリュウ (御柳) 1741~43, 1826
 キリ (桐) 918
 キリカズラ 1862
 キリトリア➡チョウマメ
 キリンカク (麒麟角) 1763, 1827
 キワタ 1759
 キンカキツバタ 1725, 1748
 キンカン 1444
 キンギョソウ 1856
 キンケイギク 1844~47, 1864
 キンケマル (金毛丸) 1861
 ギンケマル (銀毛丸) 1852
 キンゴウカン (金合歓) 1838, 1844, 1852
 ギンゴウカン (銀合歓) 1853
 キンゴジカ 1830
 キンサンジコ (金山慈姑) 1830~43
 キンシバイ (金糸梅) 1717
 キンセンカ 935, 1674, 1849
 ギンセンカ 1492, 1673
 キンチャクサボテン 1867
 キンデマリ (金手鞠) 1861
 ギンデマリ (銀手鞠) 1852
 キンホウ (金鳳) 1830~43
 キンモクセイ 1719
 ギンモクセイ 1492, 1713
 キンリョウヘン (金稜辺) 1828
 グアバ 1829
 クネンボ (九年母) 1500, 1827
 クマタケラン 1805
 グラジオラス 1857
 クリアンサス・プニケウス 1868
 クリカボチャ 1863
 クリナム 1858
 クレタケ 914
 クロタネソウ 1728, 1862
 クロツグ 1844
 クローバー 1846
 クロフネツツジ 1661~72
 クワ 720
 クワズイモ 1829
 ゲンバイナズナ 1776, 1786
 ケイトウ 785
 ケシ 1007
 ゲッカコウ (月下香) 1758, 1827
 ケマンソウ (華鬘草) 1481
 ケラマツツジ 1661~72
 ケレイネドンドルバルド 1848~53
 ゲンゲ 1525
 コウオウソウ 1664, 1699
 コウシンバラ 914, 1213, 1309, 1491
 コウシンバラ・白, 1491
 コウヨウザン (広葉杉) 1809, 1829
 コウライギク 1488, 1563
 コカキツバタ 1491, 1725, 1828
 コーカサスマツムシソウ 1862
 コガネヤナギ 1725
 コキリカズラ 1862
 コクチナシ 1709, 1827
 コクリュウ (黒龍) 1854~59
 コゴメバナ 1698
 ココヤシ 1725, 1848
 ココンリン (古金輪) 1829
 ゴジカ (午時花) 1492, 1645
 ゴシユウ (呉茱萸) 1731
 コスモス 1862
 コデマリ (小手鞠) 1645
 コノテガシワ 1696
 ゴミシ (五味子) 1716~35
 コムギセンノウ 1860
 ゴモジュ 1828
 ゴヤオギ 1680, 1698
 ゴヤバラ 914, 1695, 1736
 コリヤナギ 1635, 1825
 コロイザイル・ルメイニイト 1842
 コントラエルハ 1855
 コンチョロ 1842
 コンロンカ (崑崙花) 1844
 サクコウ (醋甲) ➡ムラサキナツフジ
 サクラキリン 1859
 サクラバラ 1736
 サクラマンテマ 1862
 サクララン 1809, 1829, 1837
 ザクロ 918, 1219
 ササブドウ (瑣々葡萄) 1819
 サッコウ (醋甲) ➡ムラサキナツフジ
 サッコウフジ➡ムラサキナツフジ
 サツマイモ 1611
 サツマギク 1719
 サツマフジ 1659
 サトウキビ 1666
 サトウダイコン 1860
 サフラン 1863
 サフランモドキ 1845, 1849
 サボテン類 1644~47, 1717, 1857, 1859, 1854~59, 1867
 ザボン 1709, 1827
 サラダナ 1775
 サラタリヤ 1861
 サルスベリ 1645, 1682
 サルビア 1818, 1823
 サルメンバナ 1862
 サンゴジュナ 1704~15
 サンゴバナ 1853
 サンザシ (山査子) 1726, 1734, 1736
 サンシキヒルガオ 1862
 サンジソウ 1862
 サンシチソウ (三七草) 1611

サンシュユ 1709, 1765	スイヨウヒ (酔楊妃) 1484	ダンコウバイ (檀香梅) 1716~35
サندانカ (三段花) 1645, 1706	スカヒオサ 1806	ダンチョウゲ (段丁花) 1814,
サンユウカ (三友花) 1866	スギモトケイトウ <u>1844~47</u>	1824
ジオウ (地黄) 1603, 1822	スズナリヤ➡ナンバンタヌキマメ	ダンドク (壇特) 1664, 1699,
シオン (紫苑) 914	スモモ 720	<u>1765</u>
シカクダケ 1711~15	スルガラシ 1657, 1717	ダンドク (壇特, 黄花) 1765
ジギタリス 1860	セイテラボーム 1859	チシャ 734
シクラメン <u>1868</u>	セイヨウバラ 1644~60	チャ 805, 1191
シクンシ (使君子) 1716~35	セイヨウマツムシソウ 1806	チャボツキミソウ 1868
シゲンジ 1659	セイヨウリンゴ 1861~63	チャラン 1644~60, 1680
シコウラン 1829	セキチク (石竹) 1001	チャンチン (椿) 1481
ジジミバナ 1698, 1765	ゼニアオイ 1491, 1662	チューリップ 1863
シダレヤナギ 751, 785	ゼラニウム 1864, 1866	チョウジ (丁香) 1848
シナガワハギ 1676	セリニンジン 1631	チョウシュン (長春) 1213
シマニシキソウ 1863	セレイテイヤ 1860	チョウシュン (長春, 白) 1491
シマミサオノキ 1829	セロリ 1598	チョウセンアサガオ 1484, 1672,
シモクレン (紫木蓮) 918	センジュギク 1664	1699
シャガ 1491	センナリホオズキ 1805, 1823	チョウセンアザミ 1736
ジャガタラスイセン 1830~43	センニチコウ (千日紅) 1664	チョウセンカサユリ 1673~80
ジャガタラユリ=ジャガタラスイ	センニンコク (仙人掌) 1814,	チョウセンゴミシ 1716~35
セン	1822	チョウセンザクロ 1709
シャクヤク 818, <u>1674</u>	センノウ (仙翁) 1378	チョウセンサンザシ 1844
シュウカイドウ (秋海棠) 1641	センリゴマ (千里胡麻) 1765	チョウセンニンジン 1721
シュウメイギク (秋明菊, 貴船	ソウシシ (相思子) 1832	チョウマメ (蝶豆) 1851, 1855
菊) 1500, 1674	ソウジュツ (蒼朮) 1727	チンコウ (沈香) ➡ジンコウ
シュクシャ 1851, 1853	ソケイ (素馨) 1802, 1814, 1828	ツキミソウ 1847
ジュズダマ 918	ソシンラン (素心蘭) 1825, 1829	ツタバキリカズラ (薦葉桐葛)
シュツコンアマ (宿根垂麻) 1860	ソテツ 1488, 1666	1863
シュロ 918	ソテツナ 1778	ツバメズイセン 1868
シュロチク (棕櫚竹) 1631, 1666	ソラマメ 1595	ツメクサ (詰草) <u>1846</u>
シュンギク (春菊) 1563, 1666	ダイコン 712	ツルナシナタマメ 1851
ショウジョウカの雑種 1844~47	ダイズ 712	ツルビヤクブ <u>1716~35</u>
ショウトウ (省藤) 1799	タイハク (太白) 1496	ツルムラサキ 1631
ショカツナ (諸葛菜) 1704~15	タケシマユリ 1664, 1699, 1848	ツルレイシ 1603
シロチョウマメモドキ 1850	タコノキ 1675, 1863	テッセン (鉄線) 1500, 1550,
シロツブ 1804~17	タチアオイ 918, 1645	1631
シロツメクサ 1846	タチバナ (橘) 712	テッポウユリ 1695, 1699, 1800
シロノセンドングサ 1830~43	タチビヤクブ <u>1716~35</u>	テンジクアオイ 1864, 1866
シロバナソシンカ 1855	タネナシブドウ 1819	テンジクボタン (天竺牡丹) ➡ダ
シロボシベゴニア 1861	タバコ 1592~95, 1599, 1835	リア
ジンコウ (沈香) 1817	タマネギ 1775, 1860	テンニンカ (天人花) 1738
ジンチョウゲ 1481, 1674	タマノカンザシ 1733, 1829	テンニンギク 1868
ズイカク (蕤核) 1759	タマリンド 1844	テンネボーム 1858
スイセン 1444	タモトユリ 1673~80, 1699	テンノウメ (天の梅) 1844
スイセンアヤメ 1841, 1847	ダリア 1841, 1842, 1846	トイフルスメルキ 1859
スイゼンジナ (水前寺菜) 1759	ダリヤス 1847	トウアズキ 1832
スイートピー 1860	ダンギク 1709, 1736, 1833	トウカエデ 1727
スイフヨウ (酔芙蓉) 1844	タンケマル (短毛丸) 1859	トウガラシ 1592~95, 1756

ドウカンソウ (道灌草) 1719, 1765	ナンバンタヌキマメ 1851, 1855	ハチク (淡竹) 914
トウギリ (唐桐) 1664, 1668	ニオイイリス 1867	ハッカサイ (白花菜) <u>1771</u>
トウキンセン (唐金盞) <u>935</u> , 1830~1843, 1849	ニオイレセダ 1828	ハツユキソウ 1868
トウサイカチ 1818~29	ニガウリ 1603	ハトヤバラ <u>1670</u>
トウジュロ (唐棕櫚) 1695	ニガタケ (苦竹) 935	ハナアオイ 1862
トウセンダン 1844	ニクイロシユクシヤ 1853	ハナカイドウ <u>1444</u> , 1746, 1822
トウチ克蘭 (唐竹蘭) 1789	ニチニチソウ 1717, 1777	ハナカタバミ 1842
トウツツジ 1661~72	ニッケイ 1681~83, 1725, 1829	ハナカンザシ 1863
トウツバキ 1673~80	ニホンカボチャ 1579, <u>1863</u>	ハナキリン 1858
トウツルモドキ 1799	ニュウメンラン (入面蘭) 1809	ハナジオウ 1765
トウモロコシ 1579	ニワウメ 720, 1366	ハナシャジン (花沙参) 1721
トウロウバイ (唐蛎梅) 1716~35	ニワザクラ <u>720</u> , 1128, 1309	ハナズオウ 1446, 1684
トウワタ 1842	ニンジン (薬用) ➡チョウセンニンジン	ハナヅルソウ (花蔓草) 1829
トキワギョリュウ 1858	ニンジン (食用) 1631	バナナ 1863
トキンイバラ 1680, 1698, 1829	ニンジンボク 1716~35, 1827	ハナビシソウ (花菱草) 1830~43
トクサラン 1789, 1842	ネジアヤメ (馬蘭) 1492, 1699	ハナモモ 1765
トケイソウ 1598, 1642, 1717, 1827	ネモフィラ 1860	ハネズ➡ニワウメ
トコナツ (常夏) 1007	ノウゼンカズラ 918, 1658	ハブソウ 1794
トックリイチゴ 1721	ノウゼンハレン 1845, 1848, 1849	バーベナ 1860
ドデカテオン 1868	ノゲイトウ 1631	ハボタン <u>1704~15</u> , 1717, 1735
トマト 1668, 1703	ノボタン 1809, 1844	ハボテン➡ハサボテン
ドリコス 1850	バークラヤナ 1863	ハマナス 1644~60
ドルレケルフル 1830~43	パイナップル 1845	バラ 914, 1644~60
トロロアオイ 1492, 1645, 1666	ハINAS 1860	バラモンジン 1835
トロロアオイモドキ 1851	バイモ (貝母) 1674	ハラシ (葉蘭) 1717
ナガオシロイバナ 1862	ハウチワマメ 1859	ハリアサガオ 1748, 1765
ナガキンカン (長金柑) 1713	ハオウベン (霸王鞭) 1763	ハリエニシダ 1862
ナガルボーム➡グラジオラス	ハカタユリ 1631, 1645	ハリナスビ 1844, 1849, 1851
ナス 734	ハカマオニゲシ 1862	バリ (馬蘭) ➡ネジアヤメ
ナタネ 1181➡アブラナ	ハクサイ 1852	ハルウコン 1716~35, 1820
ナタマメ 1603	ハクセン (白鮮) 1716~35	ハルシャギク 1847
ナツザキフクジュソウ 1860	ハクチョウゲ (白丁花) 1491, 1703	バンウコン (蕃鬱金) 1842
ナツシロギク 1862	ハクチョウソウ (白蝶草) 1862, 1866	バンガジュツ (蕃莪朮) 1849
ナツズイセン 1644~60	ハクモクレン 1677	パンジー 1860, 1866
ナツメ 758	ハ克蘭 (白蘭) 1829	パンジロウ 1829
ナニワイバラ 1670	ハゲイトウ 1001	パンマツリ (蕃茉莉) 1859
ナフトール 1758	ハサボテン 1851	ヒアシンス 1867
ナンキンハゼ 1709, 1731	ハシカンボク 1804~17, 1818~29	ヒイラギナンテン 1681~87, 1736
ナンテン 1230, <u>1713</u>	バショウ 818, 1160	ヒエンソウ (飛燕草) 1862
ナンテンソケイ 1861	ハス 712	ピオラ・ルテア 1868
ナンバンアカアズキ 1848	ハズ (巴豆) 1721, 1790, 1827	ヒガンバナ 1484, 1666
ナンバンカンゾウ (南蛮萱草) 1844	ハゼノキ 1673~80, 1765	ヒギリ (緋桐) 1664, 1668
ナンバンクサフジ 1852	パセリ 1709, 1775	ヒコウキソウ <u>1868</u>
ナンバンサイカチ 1770		ビジョナデシコ (美女撫子) 1863
		ビジンショウ (美人蕉) 1681~83
		ビジンソウ (美人草) 1645
		ビッキ 1844

ヒナギク 1868	ペチュニア 1860	マリーゴールド <u>1664</u>
ヒナゲシ 1645, 1666	ベニカノコソウ 1862	マルバアサガオ 1832
ヒマ 1863	ベニスジアマリリス 1849	マルバタバコ 1835
ヒマワリ 1664, 1666	ベニニガナ 1860	マルバニッケイ 1829
ヒメオキザリス 1855	ベニバナ 785	マルバルコウ 1850
ヒメキンギョソウ 1862	ベニバナアマ 1862	マルメロ 1595
ヒメザクロ 1709	ベニバナインゲン 1860	マンテマ 1851
ヒメサボテン 1867	ベニバナサルビア 1865	マンネンロウ 1680
ヒメバショウ 1681~83	ベニバナツメクサ 1860	ミカイドウ <u>1444</u>
ヒモゲイトウ (紐鶏頭) 1814, 1822	ヘビウリ 1862	ミツマタ 1614, 1674
ヒモサボテン 1867	ホウオウチク (鳳凰竹) 1827	ミョウガ 758
ヒモスギラン 1829	ホウキギ (帚木) 918	ムギ 712
ビャクジツ (白朮) 1728	ホウケン (宝剣) <u>1854~59</u>	ムギワラギク 1860
ヒャクニチソウ 1860	ホウサイラン (報歳蘭) 1784	ムクゲ (木槿) 1281, 1444
ビャクブ (百部) 1716~35	ホウセンカ (鳳仙花) 1454, 1675	ムシトリナデシコ 1862
ヒヤシンス➡ヒアシンス	ホオズキ 712	ムラサキオモト 1816, 1827
ヒヤシンド 1815	ホクシア➡フクシア	ムラサキナツフジ 1716~35, 1804~17, 1830~43
ヒョウタン 712	ボケ 918	ムレゴチョウ 1862
ビヨウヤナギ 1603, 1674	ホザキノイカリソウ 1805, 1833	ムレスズメ 1826
ヒレアザミ 1672	ボサツイバラ <u>1695</u> , 1736	メイテツコウ (迷迭香) 1680
ビロウ 1695	ボスメン 1844	メキャベツ 1860
ヒロハノハナカンザシ 1862	ホソアオケイトウ <u>1844~47</u>	モウソウチク 1736, 1771, 1779, 1801~03
ビワ 918	ホソバオケラ 1727	モクキリン (木麒麟) 1865
ピンブルネルラ➡オランダワレモコウ	ホソバノサンジソウ 1860	モクセイ 1444, 1492, <u>1713</u> , 1719
ピンロウ (檳榔) 1720, 1848	ボダイジュ (菩提樹) 1190	モクセイソウ 1828
フウ (楓) 1727	ボタン 806, 971, <u>1674</u>	モクレン➡シモクレン, ハクモクレン
フウチョウソウ (風蝶草) 1771, 1786	ボタンバナ <u>1698</u>	モクワングジュ 1852
フウリンソウ 1862, 1864	ボタンバラ <u>1644~60</u>	モダマ (藻玉) 1805
フクシア 1858	ホテイチク (布袋竹) 1709	モッコウ (木香) 1709
フジゲイトウ 1844~47	ホトウ (蒲桃) 1812, 1824	モッコウバラ (白) 1760
フジバカマ (藤袴) 785	ホンキンセンカ 935, 1674, 1822	モッコウバラ (黄) 1849
フジモドキ 1659	ボンテンカ (梵天花) 1603, 1844	モミジアオイ 1863
ブッシュカン (仏手柑) 1595	ホンニッケイ 1774	モモ 712
ブッソウゲ (仏桑花) 1500, 1544, 1609, 1661~72, 1706	マイカイ (玫瑰) 1644~60, <u>1709</u>	モモイロタンポポ 1862
ブドウ 1186, 1819	マイハギ (舞菥) 1852	モンテンジクアオイ 1864
フトモモ (蒲桃) 1812, 1824	マオウ 1727	ヤエヤマノイバラ 1830
フユアオイ 734	マガリバナ (歪り花) 1862	ヤキバラ (焼刃蘭) 1829
フユボタン 1663, 1683	マダケ 935	ヤグルマギク 1860
フヨウ (芙蓉) 1281, 1666	マツバナデシコ 1868	ヤシ➡ココヤシ
フランスギク 1862	マツバボタン 1860	ヤナギ➡シダレヤナギ
フレンチ・マリーゴールド <u>1664</u>	マツヨイグサ 1851, 1868➡ツキミソウ 1847注	ヤハズカズラ 1860
ヘキトウ (碧桃) 1444	マツリカ (茉莉花) 1500, 1609, 1700	ヤブカンゾウ 785, 1666
ペゴニア 1851, 1861	マメアサガオ 1850	ヤライコウ (夜来香) ➡ゲッカコウ
ヘチマ 1595	マメキンカン 1789~1800	
	マユハケオモト 1868	
	マヨラーナ 1860	

ユウガオ 1001	ワスレナグサ 1862
ユウギリソウ 1862	ワタ 799, 1469～86, 1860
ユズ (柚子) 918	ワニグチモダマ 1805, 1835
ユスデシヤカンネヤ 1853	ワリング (和林橋) 918, 1478
ユスラウメ 1603, 1661	ワンピ (黄枇) 1785
ユッコウフラチデ 1854～59	
ユーホルビア➡キリンカク	
ヨウシュチョウセンアサガオ 1862	
ヨルガオ 1854	
ラウザイバラ 1709	
ラウツマレイナ 1680	
ラカンマキ 1424, 1827	
ラズベリー 1860	
ラッカセイ 1675	
ラノンケル 1841	
ラベンダー 1860	
リクチメン (陸地綿) 1860	
リュウガン 1659, 1800, 1849	
リュウキュウアヤメ <u>1780</u>	
リュウキュウエビネ <u>1829</u>	
リュウキュウオウバイ 1825	
リュウキュウハゼ 1673～80	
リュウキュウハンゲ 1825, 1829	
リュウキュウユリ 1695, 1699, 1800	
リュウゼツラン 1859	
リング➡セイヨウリング, ワリン ゴ	
ルコウアサガオ 1850	
ルコウソウ 1624～43	
ルピナス 1862	
ルリハコベ 1818	
ルリハッカ 1862	
ルリヤナギ 1854～59	
レイシ (荔枝) 1659, 1844～47	
レタス 1862	
レダマ 1645, 1666	
レモン 1715	
レンギョウ (連翹) 1666, 1674	
レンゲ (ゲンゲ) 1525	
ロウバイ (蠟梅) 1484, 1666, 1674	
ロウザ 1644～60	
ローズマリー 1680	
ロゼルソウ 1851	
ローレア - ベスペルチリオニス 1868	